Fate/overlord　~雨生龍之介は死と出会えたようです~

bodon

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死の支配者と死の探求者。二人が進む運命とは……

＊注意＊エターなる可能性もありますが、亀のように自分ペースになりますので亀更新デスハイ。

書籍準拠ですが一応独自解釈・ＩＦ世界と、話の都合によりいくつか疑問に思うところもあるかもしれませんが、そこはここでの話ということでお願いします。

目　次

出会い　1
逃走　6
困惑　22
ネタバレ：ステータス『キャスター』　47
波紋その1　53
波紋その2　64
危機　73
不可解　82
手腕　93

出会い

「みったせー♪みったせー♪み・た・し・て・み・た・せー♪」

深夜。

軽薄なリズムに合わせ、オレンジ色の髪が特徴の、中肉中背の２０代の青年、雨生　龍之介は足先を器用に使い、手元の古い埃を被った古本を片手に、何か複雑な幾何学的な図柄を描いていた。

「え～と、繰り返す都度に四度…あれ五度？えーとただ満たされる時を破却する……だよな～？」

しかしその内容は、彼自身いまいち把握し切れていないようで、呪文を唱える姿は、明かりを消したダイニングに唯一の光源として光る、ブラウン管に写る連続殺人犯について報じるニュースキャスターにでも渡して読ませた方がよりそれっぽく、呪文らしく言ってくれるはずだ。少なくとも雨生　龍之介のように下手な歌のようには言わないだろう。しかし…

「うん。みたせ、みたせ、みたしてみたしてみたせっと、ハ～イ今度こそ五度ね、ＯＫ！…ん？」

『――れまでに起こった三件の殺害現場すべてに、被害者の血で描かれた、魔法陣と思われる謎の図柄が残されていたことが――』

「う～ん、ちょ～とハメを外し過ぎちゃったかな～」

「――――」

龍之介がソファにもたれ掛ると、そこの座っていた男……いや、〝男だった物〟は、その振動でゆっくりと、何も感じさせないように倒れた。

そこは血だまり、くだらない内容にテレビを消したことで、月明かりしか入らない闇。

男だった物、女だった物、須らく恐怖に歪めた顔は、その死の直前がどれほど恐ろしいものかを如実に表していた。

このような光景を作り上げたものなど一人。そう思えばニュースキャスターの作った演技よりも、血の匂いが充満したこの場に、軽薄な歌のような呪文は逆にその光景を作った……雨生　龍之介の狂気

を表す、映画に登場する殺人鬼のような狂った感性を、彼自身は表しているのかもしれない。計算してやっているかは別にしてだ。
龍之介は唯一の生存者……不幸な者といった方が好いか、とにかく龍之介が生かしている、この場において殺人鬼の気まぐれで生きている少年に、龍之介は語り掛ける。
「ふー……悪魔って本当にいると思うかい？坊や～」
「うッ……うッつ……」
年端もいかない少年は、もはや恐怖でまともに話せるはずもなく、ガムテープで縛られた体は風邪でも引いたかのように震えている。
「新聞や雑誌だとさー、よく俺のこと悪魔呼ばわりしたりするんだよねー。でもそれってもし本物の悪魔ががいたりしたらちょっとばか失礼な話だよねーそこんとこすっきりしなくてさー」
子供相手に話しているから少し幼く話しているのか、元々このような話し方なのか、どちらにしても少年は答える事など出来なく、龍之介は自分本位でしか語らない。
「ちゃーす！雨生　龍之介は悪魔でありまーす!!……な～んて名のちゃっていいもんかどうか」
「ひうッ……ぐ……」
「そしたらこんな物見つけちゃってさ、家の土蔵にあった古文書？みたいな奴なんだけど」
少年に見えるように、手に持っている本を見せる。
それはかなり古く、所々虫食い穴で読めないが、辛うじて日本語としてわかる。恐らく数十年前の古い言い回しで書かれたものだ。
「どーも家のご先祖様、悪魔を呼び出す研究をしてたみたいなんだよね～、そしたらさ～本物の悪魔がいるかどうか確かめるしかないじゃ～ん」
最近マンネリ化してきた〝死の探求〟。映画やゲームで始め、偽の死を見て興味が出始め、死とは何かと考え始めた、次第に蟲から動物。果ては人にまでエスカレートしていった。
初めて手に掛けた姉は今でも覚えている。あれが真に命と、そして死と向き合った瞬間であり、そこから決壊するのは早かった。その後

の話は日本各地をフリーターとして回り、すでに三十人近く殺してきた。そのどれもが違う殺し方で、一人殺していけばいくほど死についてわかり、そして遠のいていくのが分かった。
近くて遠い、龍之介にとって〝死〟とは永遠のテーマであり、彼は異端の芸術家、探究者でもあった。
元来人より無気力な人間で、しかし死の本質を見分けるのが得意なあまり入れ込み、拘りと好奇心に突き動かされ生きている芸術家肌。それが雨生　龍之介であった。
ただ最近は、彼の芸術活動が一時スランプ状態になり、ここは一旦原点回帰と、初めて殺した姉を隠した、実家の土蔵まで来て見つけたのが、今彼が持っている本であり、書かれている内容を読んでいくと、龍之介はすぐさまインスパイアされたというわけだ。
言葉の節々からも、その行いを楽しむかのような喜色を孕んでいる。これから行うことに対する純粋な好奇心や、もしかしたらという、淡い希望を龍之介は隠そうともせずに。
「でもねー、万が一本当に悪魔とかが出てきちゃったらサー、何の準備もなく茶飲み話だけってのも間抜けな話じゃん」
どちらかと言えば自分の危険よりも、相手に対しての敬意。そういったものの方が、龍之介は悪魔に対しての深い尊敬の念を抱いていた。
故に……
「だからねー坊や」
「……？」
「もし悪魔さんがお出ましししたら……一つ殺されて見てくれな～い？」
「!!!うう……うわあああ、くぐぐッあああああ!!!」
「……ふ、あはははははは!!」
少年の様子がおかしかったのか、龍之介は何気なしに見た番組が、思いのほか面白かったかのように笑う。
元々あまり期待していなかったことだ。できたらいいな、程度の遊びの間隔、龍之介自身重要なのは結果ではなくその過程、儀式を行う

ことて、今まで違った視点で死を知るということが何よりも重要なのだ。
もちろん本物の悪魔が来てくれたらうれしい、そこからは少年を生贄にでもして、自分の死について語らい、できれば教えもいろいろ乞いたいとも思っている。
しかしここまで言い反応をしてくれるとうれしいものだと、龍之介は思う。
両親を目の前で拷問し、殺し、血を抜き、今の至るまで見せたかいがあったものだと。
「悪魔に殺されるのってどんなだろうね!?貴重な体験っつ痛って!!」
少年の反応に笑っていると、龍之介は左手に鋭い痛みを感じた。
次第にそれは僅かに発光しながら浮かび上がり、次第に消えながら、残ったのは血のように赤く、片羽のような文様が浮かび上がる。
「……なんだ、これ?……」
異変はその直後から起こった。
血で描いた魔法陣が先ほどの紋様以上の光量を発し、プラズマが舞い、風(エーテル)が部屋を充満する。
龍之介はただその光景に目を奪われながら呆然と立ち尽くすだけであった。だが……
「は……あぁ」
もしも、とは考えていた。
神の存在を確信しているのだから、悪魔もいるかもしれないと、そう思っていた。
純粋なうれしさもある、しかしそれ以上に予想外過ぎた。
「あ……」
「――――――……」
悪魔を呼び出すのではなく、もっとすごい、果てしなく深い存在が来たら。
自身が求めて止まなかった存在が現れたら。
こんな簡単に?こんな間近に?疑問など目の前の存在を完全に認

識した瞬間に消え去った。
龍之介は確信する。
「……神様」
龍之介はその日、死(かみ)と出会った。

（なにこれ）
アインズ様、聖杯戦争参戦!!!

逃走

部屋を覆う死の気配。
絶望のオーラとも取れる強烈な死。
龍之介は今それを肌で感じ、今までの行為が陳腐なものだと感じた。
拘束されていた少年は、とっくに気配（オーラ）に充てられて死んでいる。
龍之介にとって幸いだったのが、そう言った死を探求し続けて、人とは違う感性を磨いた事により耐性が出来上がっていたことだ。
もし龍之介が普通の感性を持っていたなら、アインズが現れた瞬間即死していただろう。
死を元々受け入れていたことにより、そう言った精神的即死耐性を皮肉なことに持っていたのだ。
「うううう……あああああああ!!!」
（えっちょ!!急に何か泣き出したんだけどこの子!!）
雨生龍之介は歓喜のあまり、決壊したダムのように、濁流となって涙を流していた。
こんな、こんなことがあるのだろうか!!!偶然見つけた本に導かれるまま、たまたま見かけた家族を惨殺して、出てきたのは正に求めて止まなかった死!!
うれしくないはずがない。歓喜に叫ばないはずがない。雨生龍之介は間違いなくこの瞬間、世界の誰よりも幸せであった。
（えっちょ……え!?まってまってまっ――――あっ沈静化した）
当の本人、アインズ・ウール・ゴウンことモモンガは、急なことでテンパり、アンデット特有の精神効果無効化により落ち着きを取り戻しつつあった。
（うん……聖杯の知識が来てるな……それにしてもまたか……）
アインズ、元は鈴木悟という冴えない小卒サラリーマンという過酷な出時に、のめりにのめり込んでいたオンラインゲームのキャラのまま、全くの異世界にギルドごと転移してしまったことがある。都度これで二度目となるが……

（聖杯から送られてきた知識では、どうやら私はかなりのイレギュラーというわけか…）

聖杯戦争、どのような願いも叶えるという万能の願望器。興味は当然強いが、しかしそれを降臨させるには英霊といわれる人類でなければならない。

アインズの場合、肉体は骨しかない、見たまんまアンデットではあるが、元の魂は変質したからと言って、鈴木悟という人間には変わりない、そこのところは聖杯的にもグレーだが許容の範囲内だったようだ。

問題は英霊の座である。英霊はそもそも呼び出されるのは分霊のようなもので、本体はその座と呼ばれる人類の守護者のような立ち位置だ。人類全体の願い、所謂概念の集合体であり、その力は人間では到底叶わない領域らしい。故に呼び出される場所に、その英霊のイメージが強ければ強いほど、その座に居る本体と近くなりより強い英霊、サーヴァントとして顕現する。

アインズの本体は今もナザリック地下大墳墓に居る。〝今は全てが片付き、ナザリックで友たちの帰還を待っている身〟、英霊としてのシステムが正しいならアインズは本来居るべき存在ではないのだが…。

次第に送られてくる聖杯の知識には以下のとうり。

1、ここは鈴木悟のいた世界から数百年前の世界

2、異世界側の世界征服を行い、莫大な信仰を得たことによる神霊化

3、それに伴い聖杯がナザリックを英霊の座、またはそれ以上に順受ると判断

4、平行世界などからも呼べるからいいんじゃね、と安定の例外大好きガバガバ判定

5、反則まがいだが召喚に成功

6、いまここ

（……はあ!?）

まず一番に驚いたことが、ここが彼の故郷で、しかもかなり昔、2

１３８年に異世界に転移した。現在１９９０年だとすれば、１４８年ものタイムスリップだといえよう。
（えーうっそ、俺の故郷昔に魔術なんて当たの！すっごいビックリなんだけど!!）
しかし、そう考えると辻褄が合う。
アインズは長年、どうやって異世界に来たのか結局わからずじまいであった。
しかし、聖杯の知識が本当だとすれば、未来の鈴木悟は何か神秘的な力が働き、異世界に転移したと考えるべきか？それ以外の方法があったとしても、やはり魔術といった、超常的神秘でもなければ、異世界転移など出来るはずもない。アインズはそう結論付けた。
他にも、２１３８年には技術停滞などと叫ばれていたが、それが進歩を嫌う魔術師の妨害によるもののせいなのかどうか知らないが、一応は筋が通る。
（ふう……精神抑制はほんと便利だ）
余りにもショッキングすぎてビビるアインズではあるが、恒例の精神抑制で目の前のマスターらしき人物に醜態をさらす、といったことはなかった。
（……てかこの子いつまで泣いてんの!?周りも拷問部屋みたいだし…）
今更気づく赤く染まったダイニングに、子供のように大泣きする大人。
控えめに見てすっごい絵面である。
（流石に話をしないと、このままじゃ聖杯戦争を勝ち抜く作戦も練れないし）
「……マスターよ」
「う……あ」
不意に声をかけられ、龍之介は戸惑った声を発す。
一体何と言えばいい、いやそれよりこの御方に自分の醜態を見せていたことが恥ずかしい。
だが抑えきれなかった。龍之介自身、無気力な人生ではあったがこ

こまで心揺さぶられたことなど一度もなかったのだから。
「……そろそろ話をしてもいいかね？」
「……あ、はい」
「よろしい」
アインズは一つ頷く。
「さて……もう一度確認しよう。君が私のマスターだね？」
「……？」
「おいまて」
つい口が出てしまった。言われた本人はアインズ以上に状況を飲み込めていない様子……つまり、
「……確認するが聖杯戦争について知っているかね？」
「え？何ですかそれ？」
（やっちまったーーー!!）
まさかの偶発的召喚。いやそもそもアインズ自身そんな正規の手順を踏んだ召喚なんかじゃ呼べないような、正しくイレギュラーのような存在なのだ。ド素人の奇跡的なまでの偶然が呼んだ召喚と、今回は言えるだろう。
（だがそれにしてもだ。俺はユグドラシルの魔法しか知らないんだぞ!!こっちの世界、もとい、俺の故郷の魔術なんて表の世界で育った俺が知るはずないし!!てか俺の故郷こんな人外魔窟だったのかよ!!聖杯の知識でさわり程度でも知ったがヤバすぎるだろ!!なんだよ死徒二十七祖って!!チートじゃん!!こっちの世界の英霊もやばいんじゃないの!?タブラさんの話もっと真剣に聞いとくべきだった!!あー情報ほしい!!せめてこっちの魔術がどんなものか知らなくちゃ対策立てられないっていうのに!!!いきなりど素人、てか魔術師でもない召喚士かよ!!くっどうすりゃ……ふう）
「あの……どうしましたじゃなくて、どうされました？」
「ん？いやなんでもない、そもそも私を呼べるのも偶然じゃなければ出来ないようなことだからなうん、そう思おう、うん」
自分のことを棚に上げて人外魔窟と称する魔王は、ひとしお混乱した後また精神抑制…今回何度使用されることやら。

「……とりあえず私の方から説明するが、いいかね？」
「えっと……あの……その……」
「？」
龍之介はもじもじと、腫れ上がった瞼を下げ、とても言いづらそうに、だが決心したかのように答える。
「お、お、お、おれっれ」
「落ち着け」
「ふーふー」
（あー俺も精神抑制なかったらこんな感じなんだろーなー）
「ふー……あ、あの!!」
「ん？」

「……俺を傍に置いてください!!」

「……うん？」

＊＊＊＊＊＊＊

「つまり君は〝死という物〟を知りたくて、この現場のような行為を何度も行っていると？」
「は、はい光栄です!!」
（光栄でもなんでもないんだけどなー）
先ほど龍之介から説明を受け、なぜ自分はアインズの元に居たいかを、熱狂的、それも超がつくほどのロックスターにでもあったかのようにテンパりながら喋るファンのように、これまで自分が歩んできた人生観など含め、現状の儀式殺人に至るまで、テンパりながらだが事細かに説明を受けた。
（なるほど……マスターの死の探求心と、私の〝死の支配者（オーバーロード）〟としての特性が、今回偶然かみ合い、このような結果になったとみるべきか……）
アインズは納得し、同時に自分はほかのライバルたちとかなりの

差を開けてしまっていると実感していた。
（……ふむ、やはり情報が足りない。聖杯戦争を目指して準備してきたものなら、何かしら敵マスターの情報があると思ったが……今回は数合わせのマスターみたいだからな、仕方ない参加できただけよかったと考えよう）
「あのそれで俺いや私は、神様のそばで死をもっと見たいのっです!!」
「あーうん、わかった。そちらの事情は、だが神様というのはやめてもらう」
「え？何故です。神様は神様じゃ…」
「あーまあ向こうじゃ神みたいなもんだが…とにかくこちらからも説明する。いいなマスター？」
「はい!!」

＊アインズ様説明中＊

「っというわけで、聖杯戦争とは7騎のサーヴァントとの殺し合いの末、何でも願いが叶う聖杯が手に「すっげー!!」……うんまあすごいな」
テンションダダ上がりの龍之介とは対照的に、アインズは心配になってくる。
（……警察にも追われ、魔術も使えず、おまけにサイコパスな殺人鬼…いやここは他人事じゃないか）
正直敵が未知数な中、このマスターでは勝機は少ないと思った。
唯一の救いはアインズを崇拝していることでしかない。
（最悪損切として別のマスターを探すのも一考か…）
アインズは真剣にそう考える。
無理もない話だ。彼にはどうしても叶えたい夢がある。

その為には、どのような手段も厭わないつもりだ。
世界を征服し、人の輝きにも触れ、世界の素晴らしさも理解した。
（だからどうした）
そう、だからどうしたのだ。
至高帝とも呼ばれ、友の来る日を待ち望みながら。
他の人間種のプレイヤーともいざこざを避けるため、異世界側にも目に余るほどの繁栄を与え、ナザリックを、アインズ・ウール・ゴウンを称えるようにし、正しく世界はアインズ・ウール・ゴウンこそ最高の物だと言えるほどにしたのだ。
もちろん、百年周期に現れるプレイヤーとも会話し、プレイヤーの保護と銘打って監視を付けながら、アインズ・ウール・ゴウンは自分の知らないところで頑張り、とてもいい組織になったと思わせていった。それがダメなら闇に葬るが。
そこから本当に長いときである。来る日も来る日もカレンダーにチェックを入れ、百年たったら世界中に張り巡らせた〝目〟を使い、プレイヤーと思しき者達と接触する。そんなことを繰り返しはや数百年。それまでの楽しみと言ったら配下の僕たちとの語らいや、ハムスケと一緒に送られてくる供物を、あれがいいこれがいいそれがいいと言いながら、芸術にも目が肥え、収集癖で骨董品なんかにも嵌りだしたりしていた。それが楽しくなかったとは言わない、寧ろ異世界に来る前、鈴木悟の頃より充実していた。それでも…
（ああ……また会いたいものだ……）
アインズの願いは変わらない。
かつてのギルドメンバーとの再会。それは異世界に転移してから全く変わらずアインズの行動原理としていた。
征服した世界も、いつでもメンバーが訪れていいように、たっち・みーの為に弱者にやさしく（少なくとも表面上は）、ブルー・プラネットの為にできる限り自然に手を付けず、ペロロンチーノに至っては、魔法でエロゲーは出来ないかと考えたものだ……まあ考えただけで出来るかどうかは分からないが。
（だからこそ……だからこそ絶対このチャンスを逃さない！）

ナザリックでの生活は不確かなものだった。来るか来ないかわからないそんな日々、だが今は違う、確実に世界級（ワールドアイテム）クラスの、ウロボロス・リングのような効果だが、与えられた知識ではこちらの方が汎用性が高い、つまりもう一度、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーと出会うことが出来るかもしれないということ。

（最悪、もう一つの手段も考えられるが…まあそれはこっちの戦力を把握してから考えよう）

アインズは更なる決心を固め、恐らく生半可な戦いではないが、それでも今までにない希望が転がり込んできたのだ。俄然やる気は出で来る。

「くう～流石神様…じゃなかった。キャスター…様……なんか違うな～」

「アインズでいい、どちらにしろ真名がバレタところで…ああいや、もしかしたら…」

こちらの世界での魔術、呪術も含まれると何がアインズに効果を及ぼすかわからない現状、こちらの強みともいえる、まだ他陣営に情報が渡っていないというアドバンテージを捨てることはない。もし仮に、真名から様々な情報を抜き出す宝具やら魔術やらがあれば目も当てられないからだ。

「……やはり情報収集が最優先か…異世界に来た時を思い出す」

「あの～神様？」

「ん？ああすまん、呼ぶときはやはりキャスターで頼む」

「はいキャスター様!!」

「…さんでいいぞ」

びっしっと敬礼をする姿は本当に子供のように、今すぐにでもはしゃぎたくなるような子犬のような印象を、アインズは抱く。

「しっかしほんとにすごいっすね～キャスター様っじゃなかったさん」

「そりゃな、私も驚いたよ、まさか願望の万能機なんて、私の故郷にあったとはな」

「違いますよ～そんなんじゃなくてですね～」

「？」
「世界征服なんて、ちょーーーーＣＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＬじゃないっすか!!」
「え?!なに、さっきから興奮してたのそこ!?」
てっきりアインズは、聖杯戦争について興奮しているとばかり思っていた。
しかし実際、龍之介自身聖杯なんてものには興味はない。それ以前に目の前の御方と出会えた時点で自身の夢の半分は叶ったも同然だ。残り半分はこの御方と共に居たいと思う、純粋な崇拝からくるものだ。
アインズが龍之介がした身の上話のように、かなり掻い摘んでだが、これまでの自分の歩みと、自身が聖杯に託す思いを語った。社会人として相互の理解を深めるのは基本である。
「ほんとにほんとにマジマジリスペクトつーか、マジすげーとしか言えないっすよキャスターさん!!」
「お、おう」
（こ、これがこの時代の若者なのか？このテンションはついていけないぞ?!）
ただし相互の理解は実際深まるとは限らないが。
「…う゛う゛ん、興奮するのは分かるがそこまでだぞマスター」
「あ……すみませんキャスターさん、でも俺のマスターじゃなくて龍之介でいいんすよ？」
「いや、何処から情報が漏れるかわからん、現状このままでいい、それより」
アインズは向き直ると、その眼球の無い、変わりに赤い炎を宿す目で、龍之介を見る。
見つめられた龍之介は、改めてアインズの美しさに目を奪われている。正しく死の芸術として。
「…マスター、君の願いとスタンスは何かね？聖杯戦争を知らなかったとはいえ君は巻き込まれた、ならば最終的に私は聖杯を手にするつもりでいるが、君の願いや聖杯戦争に対するスタンスを聞いてお

かなくちゃ、お互いわからず作戦を立てられないだろ？何を許容し何が許せないか、それくらい聞かせてくれないか？私はさっき言った通りどのような手段も厭わないが、暫くは情報集で穴熊を決めるつもりだが？マスターの願いとスタンスは何だい？」

「……え？俺っすか？」

「そうだ、君以外に誰がいる？」

アインズは語り掛けるように言っているが、実際ここでお互いのスタンス、たとえばアインズが『いのちはだいじに！』と言っているにもかかわらず龍之介は、『ガンガンいこうぜ！』と言った場合、アインズは本格的に損切を行うだろう、まあやるにしても代わりのマスターの目途が立ってからだが。

「……俺はキャスターさんの言う通りにしますよ？」

「ん？つまり暫く穴熊でいいと？」

「はい！」

（ふむ、第一段階はクリアか…）

「では願いは何だい？」

実際ここが難しい。

聖杯には使用限度があり、貯まった魔力を使い奇跡を行使する。単純に使ったらなくなるのだ。

ここで龍之介が聖杯のリソースを大幅に失う願いを持ち、尚且つそれを諦めなければ、龍之介はそこでアウトとなる。

第一アインズの願いはもう一度友と出会うこと、時間跳躍や、出来れば本体の居るナザリックに、行きたい者達だけでも連れて行ってやりたいのだ。当然リソースは莫大だ。そんな大きな願い大抵他の願いとバッティングするが…。

「……俺の願い」

「そう、君の願いだ」

「そんなのありませんよ？」

「へ？」

予想外だ。

まさかないとこうまで完璧に言われるとは思いもしなかった。

「ほ、本当か!?万能の願望器、どのような願いさえも叶うのだぞ！」
「はい！だって俺の願い叶ってますもん！」
「…あ」
そういえばコイツは、死を知りたいが余り連続殺人なんてやってるやつだ。
アインズを一目見たとき傍に居させてくれと頼む狂人だ。
「え～とつまりマスターの願いは…」
「俺の願いはあなたです!!神様!!あなたと出会えたことが俺の願いなんです!!」
（……あ！フールーダかこいつ!!）
自身のナザリックで、エルダーリッチになった弟子を思い出す。
そういえば誰かに似てるなと思えば、正しくフールーダではないか。
「あー……わかった。マスターよ、この聖杯戦争に勝ち残ったら、お前を我がナザリックの一因にする」
「あ!!ありがとうございます!!!!神様!!」
へへーと、土下座姿勢で平伏する姿に、こっちでも死の支配者として疲れそうだと改めて痛感するアインズ。
「いよ～し!!そうと決まれば雨生龍之介、微力ながら頑張ります!!拷問でもなんでも頑張ります!!」
「お、おう、期待している」
「はい!!
（心配だ…）
やっぱり情報収集と並列してマスター探しでもするか?と、龍之介の能力に不安しかないアインズ。
例えどれだけ相性がよかろうと、アインズはユグドラシルの魔法しか使えない。
こちら側、というより鈴木悟の元いた故郷の、それも１９９０年まで使われている魔術なんて使えないし、これから学んで技術を習得できるのかも謎だ。
自身の魔法が、こちらじゃ魔術、一部魔法のようなものもあるが、そ

れらに対しどれほどの対抗力があるのか見当もつかないのだから当たり前だ。
（最悪、ユグドラシル魔法がこちらじゃ全くの役に立たない物だったとしたら…マジックキャスターの自分は絶望的だな…）
「あのーキャスターさん？」
「？どうした」
「キャスターさんの願いって、お仲間ともう一度会いたいってやつですよね？」
「そうだ、それがどうした」
「てことはキャスターさんの仲間ってすごい方たちなんですよね!!」
「!?そ、そうだぞ!!私の仲間たちはそれはもう――」
先ほどとは打って変わって上機嫌なアインズ、仲間を褒められるとテンションが上がるのは昔からのようだ。　ちょろい。
「かー!!俺も会いたいなー!!」
「……そんなに会いたいか？」
「もちろんすよ!!キャスターさんの仲間なんて、どんなすごい方たちなんだろ、死とはまた別なのかな？あーわくわくするー!!」
（……まあ暫くはコイツがマスターでいいか）
ほんとチョロインである。
「あ！そうだそうだ」
龍之介は何か思い出したか、先ほどから黙している少年へと駆け寄る。
「ごめんごめん坊や、すっかり忘れてたよ。今キャスターさんに……あれ」
「…？どうした」
「死んでる…。キャスターさんの為に残しておいた子が死んじゃってる…」
「ええ…」
そんな悲しそうに言われてもアインズは困るしかない。
第一生きてても魔法実験にしか使わないから、彼の想像しているよ

うなことはナザリックの者たちぐらいしかやらない。
「あー別にそんあ顔をするなマスター、死体だけでも十分だから」
「あ！そうなんですか!!俺てっきり生きたまま頭をバリバリ食べるのかと思いましたよ」
「やらんよそんなこと」
「ははは、でも不思議だな～いきなり死んじゃうなんて」
「……あ」
《絶望のオーラ》切り忘れてた。
うっかり召喚された時の混乱で、絶望のオーラをランクⅢとは言え漏らしていたのだ。
（あちゃー、すっかり忘れてた。なんかあの子には悪いことしたな～、それにしてもマスターは平気ということは、やっぱり耐性があるってことか？あっちじゃ奇人狂人問わず物理的に行けたけど…、こっちじゃやっぱり仕様が変わってるのか？）
「……試してみるか」
そうゆうと、アインズは指先を子供の死体に向ける。
「《上位アンデット作成／暗闇（ダークネス・ストーカー）の追跡者》」
直後、少年の内側からタールのようなものが包み込み、それが肉となって、見る見るうちに龍之介と同程度の身長になってゆく。
姿かたちはまるでニンジャだ。しかし違う点上げろとすれば、その者の目に眼球はなく、腐乱した死体である。
「はあ～すげ……」
ため息しか零せない龍之介。
圧倒的な死を、映画などではないどこまでも遠く、どこまでも近い死がそこにあり、感動で声にできないのだ。
「さて、デスナイトはデカすぎるし情報収集向けじゃないからコイツにしたが……」
（何故だ？日に数回アンデット作成は魔力の消費はないスキルに該当するはずだが…こちらの英霊になったせいか色々な面で弱体化してるのか？やはり異世界の英雄では知名度補正が痛いか……）
もしもアインズが異世界で英霊として現れたのなら、それはもう反

則チートの領域だ。誰も勝てないような、こちら側での神霊としての最上位の存在である。

（後でいろいろ試さないとな…その前に）

「そこの死体もダークネス・ストーカーにしておくか」

これで計三体の上位アンデットが出来た。

アンデットはまあ効果としては代償が増えた程度、そこまで気にする程ではないが、今のところ作成したアンデットのレベルが最低レベルの６０なのが気になる、まあ素材にした物が悪かったのだろうと結論付けた。

（ダークネス・ストーカーは戦闘向けじゃなく、斥候向きのスキル構成だから戦闘しないしこれでいいだろう）

「ダークネス・ストーカーよ、戦闘はせず聖杯戦争に関する情報と、この世界の魔術に対する知識を集めろ、ただし絶対に見つかるな。見つかった場合すぐさま自害しろ。いいな」

ダークネス・ストーカーは無言で頷くと、闇に溶けるようにその場から消えていった。

「うわ～ＣＯＯＬ」

「さて…隠蔽しなくちゃな」

龍之介の惨殺現場、ついでにこれを隠すのにも魔法を使ってみる。

「《修復（リペア）》」

アインズが指さした先の割れた花瓶は、巻き戻しの映像を見ているかのように、みるみるうち元に戻って行った。

「ひゅー！すげー!!すごいぜキャスターさん!!」

「この程度造作もない、しかし…うん、これもＭＰ消費が多少上がった程度か…」

「キャスターさんからなんか見えてくる、ＢとかＣとかのステータスみたいな表記もやっぱキャスターさんの魔法っすか！なんかＣＣＯＬでいいっすね!!」

「いやそれは違うがやっぱりユグドラシル魔法は制限がかかっているか、一々試さなくてはならんとは、宝具だって確認しなきゃ――――」

「…？」

そうだステータス確認すればいいんじゃん（今更）

（すっかり忘れていたッ!!聖杯から知識が来ていたにも関わらず、最初にテンパって忘れていたッ!!!）

「キャスターさん？」

「ああ大丈夫だ！今から確認を――」

「なんか朝日出てきてます」

「……」

（時間かけ過ぎたーーーー!!!）

「ええいとにかく隠蔽は私がしておく!!マスターは逃走経路の確認を!!」

「らッらジャー!!」

焦る焦る焦る。

アインズは僕たちがここに居てくれたらとどれほど良かったかと思う。少なくともデミウルゴスなら、こんなことになる前に勝手に進めてくれただろう。

「《修復《リペア》》！、《修復《リペア》》!!、《修復《リペア》》!!!、ああもうここは《消滅《デリート》》!!!うっわすっごいＭＰ減った!!」

何気なく使った第九位階魔法が思いのほか消費量が多くビビるアインズ。

この世界の自分の立ち位置、しかし元は自分がいた過去の世界だとしても、自分が知らなかっただけで裏では恐ろしい月の姫など、死徒二十七祖の居る世界だ。正確に自分の力を確認するまで目立ちたくはない。

異世界の時はもっと楽だったな～と、精神抑制の効果が利いて落ち着く、もとい現実逃避になっているが、現場はもう完璧に、凄惨な事件があった場所とは思えないくらい片付けれてた。

「――ふうよし！後はマスターが」

「逃走経路確認終わりましたー!!」

「早いな！」

「任せてくださいよ！俺って４２人も殺してるのに、警察に一度も尻尾掴められて無いんですから」

「まじか」

龍之介の何気にすごいスキルを目の当たりにし、やっぱりこの世界の人間ヤバいんじゃ…いやでも元は俺の世界だし、いや待てもしかして、過去の俺の世界がヤバかったのか!?っと、どんどん故郷に対し危険意識のハードルをガン上げにするアインズ。

「とにかく脱出するぞ!!」

「はい!!一生ついていきます!!」

その後、首尾よく元凄惨な一家惨殺現場からの逃走に成功。

翌日のニュースでは、一家全員が忽然と姿を消したとして、連続殺人犯との関連を調べるが依然行方不明、この事件は迷宮入りとなったのであった。

「ところで拠点はどこだマスター？」

「下水道ですキャスターさん!!」

「マジか――…」

困惑

「ふー、とりあえずここまで来れば何とか…」

死の支配者にして絶対者、その正体は数百年たっても小市民が抜けられないアンデット、鈴木悟改め、モモンガも改名し、アインズ・ウール・ゴウンからも偽名でキャスターと言われるお前何重に名前変えてるんだと言われそうな御方、アインズ・ウール・ゴウンはいま、龍之介のアジトである下水道に来ている。

「まさかもう明け方だったとは…お蔭で余計に疲れた…これから色々しなくちゃいけないのに…」

雨生龍之介は、懐中電灯を片手に、慣れているのか複雑に入り組んだ道をスイスイとわたっていく。床は滑りで一歩間違えれば汚水に浸かってしまうが、アインズは嫌なので霊体化したまま魔法の行使の時だけ実体化するようにしている。

「ふーんふふーふふーん♪、お！ここですよキャスターさん!!俺の彼拠点！」

「……」

そこはコンクリート壁が凸型になっている場所で、およそ畳五畳分はあるだろう。

そこにはカーペット、椅子にテーブル、ラジオに何かに使う刃物が多数。

「……流石にこれはなぁ」

警察に追われていれど、その尻尾を一切掴まれない逃走技術は、魔術を一切使えないという点を考慮し、アインズでさえ目を見張る技術だ。だが生活感はあれど、だてにナザリックで超が付くような生活をしていたアインズには少々…というより普通の生活を送ってもこれはない。

（やっぱり警察に追われるとここまでしなくちゃならんのか…てかクッサ!!…なんで味覚がないのに嗅覚あるんだろう…）

霊体化を解き、実体となったアインズは、下水道特有の汚物の臭いに、顔筋があれはひどい顔をしていただろう。…龍之介は全く意に介

していないのは流石というべきか。
（消臭剤があるってことはやっぱり気にしてるのか…ああいや、殺人を犯す時に使うのか？）
臭い自体そんな簡単に取れる物かと思ったが、この時代にはまだ銭湯なるものがある。消臭剤はそのダメ押しか、血の匂いを消すのに使って警察犬対策にでもしているのだろう。
「それでどうしますキャスターさん！」
「んっ？…ああ！そうだなまずは…」
アインズは、ここまでくる途中で使った魔法を発動する為、指先を頭上に掲げる。
「《偽りの情報（フェイクカバー）》、《探知対策（カウンター・ディテクト）》、《擬態の壁（ウォール・オブ・カムフラージュ）》──、」
その他にも、アインズが使える情報系魔法を思いつく限り使用する。
「…？なにしてるんですか」
傍から見ればアインズは、ただ骨しかない指を天井に掲げ、何やら唱えただけにしか見えない。
「ん、そうだな…龍之介、ちょっとそこまで行ってみてくれないか？」
「？は～い、わかりました」
龍之介はとりあえず言われた通り、数歩先の位置まで歩いた。
「歩きましたけど、これっていったい…!!」
何とそこには、先ほどまであったはずの壁のスペースが全くなくなっていた。
当然アインズも見えず困惑する龍之介。
「…どーなってんだ？……あっ！戻った！」
歩いた場所に戻ると、先ほど窪みを消していた壁は、まるで初めから無かったかのように消え。アインズは満足そうに頷く。
「《擬態の壁（ウォール・オブ・カムフラージュ）》、幻術魔法の中で周りの壁と同じになり、長時間にわたり持続し、半径４メートル以内でないと見えない魔法だ」
「へー」
（だけど長時間と言っても精々課金して三日程度だが…この感じだ

と一年……いや下手したら二、三年は思ったより続くぞ…。異世界の時と同じように、ゲーム時間が現実に反映されているのは間違いないのか…）

まあレベル差があれば意味ないんだけど…と心の中でしか言わないが…。

一通り唱え終え、次の魔法はユグドラシル内でも非常に有効な、〝アインズが使えなかった〟魔法だ。自然と気持ちも強くなっていく。

「……第九位階魔法《深層迷宮（ディープラビリンス）》！」

……なにも起こらない。

「？また何かしたんですか？」

「ふむ……、途中途中で唱えていて、実際に効果が発揮されているかは感覚でしかわからなかったが……、見てみるか。《物体発見（ロケート・オブジェクト）》！」

アインズは龍之介に対し、探知系の魔法を行使する。

するとどうしたことか、アインズには目の前に龍之介がいるにも関わらず、魔法の結果では地表の…丁度穂群原学園のグラウンドに居ると結果が出た。

「《物体発見（ロケート・オブジェクト）》」

もう一度アインズは唱えると、今度は建設途中の冬木市民会館と出た。

「ふむ、問題なく発動しているようだ」

「？」

《深層迷宮（ディープラビリンス）》、この魔法は対象の位置情報を見ようとすれば、ランダムで偽の情報を掲示する魔法である。ただ何度も…、運が良ければ早い段階で正しい情報に当たるが、それを得た本人が本物の情報か、偽の情報かわからず、グルグルと迷路のように調べまわるからことで、このような名前になっているという。もちろん対策もあるが…。

（この魔法は情報特化系のスキル構成じゃ得られないはずじゃ……俺が使えるのは明らかにおかしい…）

そう、この魔法は高い情報特化系の職業、または種族に特化したレベルでなければ得られないのだ。

死の魔法使いのロール重視のビルドでは決して得られるはずもな

い魔法なのに。
（それにこの魔法……ここまで来る途中にも隠蔽のため、幾つか発動したが……他の今まで使えていた魔法の消費量が1．2倍だとすると、これは1．5倍になっている……と言うよりこれだけじゃない！）
アインズの知識にはしっかりと、今まで得意としてきた死霊系魔法の他にも、自分が知りえない魔法や、ユグドラシル時代の見覚えのある魔法まで、全てとはいかないが、第九位階魔法までなら殆ど使えると、感覚的にわかった。それこそ自分じゃ使えないと思っていた信仰系魔法や、異世界の生活魔法ですら……。
「……《清潔（クリーン）》」
試しに使ったアインズが指さす方向の、シミや汚れは驚きの白さで、あんなに汚かったスペースが、あっという間に綺麗になっていく。心なしか空気までも綺麗になった気分だ。
「うっわすげー」
（なにこれすごい）
あんなに頑固な汚れが消えていき、驚きの白さだ。
同じユグドラシル魔法から派生した生活魔法は取得できず魔力消費量などは比較できないが、便利であるとつくづく思う。そりゃ魔法文明が発達するわけだと、アインズはしみじみ感じた。
アインズ自身、ナザリック強化のために、様々な技能を習得しようとしたが、結局生活魔法は習得には至れなかった。その代わりなのか知らないが、ナザリックの地表部分は、超々々々巨大な五稜郭を作ってしまったのだが…。
（……これはあれか？今まで問題なく使えるやつの負担は少なく、使えなかった奴は負担が大きく聖杯が設定したのか？）
理由は分からないが弱体化の一つなのだろうか？、いやそれなら初めから魔法を大幅に制限すれば、それだけでアインズは大打撃なのだが……。
（だが最も腑に落ちないのが《消滅（デリート）》だ。あれは他の魔法より2倍…いや1．8倍くらいの消費量だったぞ…）

《消滅(デリート)》。ユグドラシルでは文字どうりデータを消滅させる効果の魔法だ。
『聖者殺しの槍』の下位互換と言われているが、実際はそんな恐ろしい魔法ではない。寧ろ産廃魔法だ。
消せるのは低位のデータのみで、もちろんプレイヤーやボスなんかは消せやしない。高位データにしたって発動すれば、ｍｉｓｓの表記が出るのみだ。
アインズはレベル上げの途中、どうしても取得しなければいけなかったから取ったまでで、使えば素材のデータクリスタルまで消滅してしまうから、アインズ自身一度も使ったことがなかったりする。
（……もしかしたら、こちら側の魔法……じゃなくて魔術に無理やり型を嵌められた結果、こっちの魔法に近いユグドラシル魔法は消費量が跳ね上がっているのか？それだったら《時間停止(タイム・ストップ)》も安易に使えないな…）
アインズの推測としては、聖杯がアインズ召喚のさい、色々と拙いことになるユグドラシル魔法に制限をかけたのでは……とアインズは思うのだが……。
（それだったら他の魔法を使えるのもおかしい……消費量が上がって、超位魔法も使いどころが難しくなったが、それじゃあ対応力や瞬間火力では持続性以外、本体の俺より強いぞ……それにパワーバランスを崩す魔法だって多いし……、この世界の魔術が俺のユグドラシル魔法より上の可能性を抜きにすればだが……）
アインズの使うユグドラシル魔法、こちらの世界からしたら目を疑う物が多い。（アインズとしても第二魔法とか、アルティメット・ワンとか頭おかしいと思うが…）だがもし、それが実際この世界で大したことなければ？
（……聖杯が俺の魔法を脅威として認識せず。ただ単にこちら側に来て、知名度補正の無さで純粋に消費量が上がっただけだったら……）

マ・ズ・イ。
（いやだー!!早く情報もってきてー《暗闇の追跡者（ダークネス・ストーカー）》!!）
最悪な状況を考え、精神抑制が連続で発動している。
知名度補正など、異世界側では信仰系魔法などがあったが、当の信仰される本人の力は強くなることはなかったが、こちらではそういった思いの力が重要になると、アインズ自身薄々聖杯の知識で感づいていた。
神秘とは不可思議であり、人が夢想する場にある。
現代では科学技術の台頭で、そういった不思議なものに理由がつけられ、不思議ではなくなりただのうさん臭い（オカルト）物になり下がった。大昔の神話の時代に比べれば遥かにそういったは物が失われ、だから現代の魔術師は、神秘の秘匿にこれでもかというほど神経質なのだ。自分たちの力を保つために…。
そしてこれがユグドラシルの魔法が一体どこまで有効か……。
「──……スターさ～ん!、キャスタ～さん!!てば!!」
「……お!……ああすまん、つい考え事をな」
「え!どんなことですか!?超知りたいっす!」
「……」
無邪気でいいな～っと、思うのだが、あんまりにも考えすぎても仕方がない。聖杯の情報じゃ（なぜか）少なすぎるし、これは《暗闇の追跡者（ダークネス・ストーカー）》が来るまで棚上げだ。
（……しかし）
「やっぱキャスターさんなら、人間をもっと芸術的な物にすることとかを…、オルガンみたいな…」
（……はあ～気楽だ）
アインズにとって、ギルドメンバーの子供たちとも言える僕が傍に居ないのは、精神抑圧があるとしても、常に気を張って超越者として振る舞うことをしなくてもいい分、多少龍之介に対し振る舞っているとはいえ、当の龍之介も精一杯敬意を取ってるが、やはり使えなれていない敬語ではどうしても素が出ているからか、アインズも気が緩んでいるようだ。

龍之介は今のところ裏切る様子も、逆にどんどん心酔して行っているようで、なんだか少々馴れ馴れしいが、見ているとハムスケみたいにうろちょろとし、その実弟子のフールーダのように信仰され、それを足したような奴で、僕たちが居ないのは確かに寂しさもあるが、ある意味で龍之介しかいないのは、アインズにとって新鮮であり、なんだか愛着のようなものもわいてきていたのである。

（まあ今は聖杯戦争中、本当なら常に気を張ってなくちゃいけないけど……）

これがもっと警戒心の高いマスターなら、アインズの外見で一発、初めに令呪を使われていただろう。そうなってはさらに不利な状況がさらに不利になる。

この戦争はアインズにとって千載一遇のチャンス、最初からアインズに全幅の信頼を持っている戦争参加者は、恐らく龍之介しかおるまい。それ故少々気を許しているともいえた。

（そう考えると十分当たりのマスターなのかもな）

「ん？どうしましたキャスターさん」

「いや…まあ考えていても仕方ない。今はもっと目先のことだ。…《空気洗浄（エアーウォッシュ）》、《上位部屋創造（クリエイト・グレーター・ルーム）》《永続光（コンティニュアル・ライト）》」

アインズの指さすと、先ほど籠っていた臭気はたちまち消え去り、みすぼらしい場所が一瞬で広々とした、黒を基調とし、金の線で縁や見事な模様を描いた壁や床、扉が現れた。天井には光り輝くクリスタルが、周りの模様を美しく栄えさせている。

「《上位道具創造（クリエイト・グレーター・アイテム）》」

すると今度は、壁と同じ色合いの椅子やテーブル、食器棚までもが現れる。

「《上位食物創造（クリエイト・グレーター・フード）》」

更に今度は見事なまでの、豪華としか言えない食事が現れる。

丸々と太った七面鳥の丸焼き、焼き立ての白パンにバターとマーガリン、魚介をふんだんに使ったクラムチャウダー、瑞々しい新鮮さを放つサラダ、アツアツのポテトにソーセージとハムの上に架かるチーズなどが並ぶ。

ぐ～。
「……あ」
見事な料理の数々に、思わず龍之介の腹の虫は泣いたようだ。
「ふふ、食べていいぞ、これはマスターの為に用意したものだからな」
「あ、ありがとうございます!!俺昨日から何も食べてなくて、しっかしキャスターさんってマジ魔法使いみたいですね！」
「魔法使いじゃなくてマジックキャスターなんだが…まあいい、これでやっと腰を落ち着かせれるな」
どっしりと、アインズは深く椅子に腰かける。
（ふ～ここまで来るのに思わぬ労力を使った…、魔力もまだ余力はあるけど、一応回復するまで待つとして……）
「いっただっきまーす！ガツガツ…ンぐガツが…ゴグ……」
「あ、慌てなくてもいいぞ」
「ンぐ……いや～、こんなに旨いのは初めてっすから!!頑張って全部食べつくしてやりますよ!!」
「あ、いやそれは魔法で作ったものだから、食べなかったら勝手に消えるしだいじょぶだぞ？、しかし本職の料理人にはかなり劣るものだから、魔法効果なんて微々たるもので、人間種の空腹を満タンにすることぐらいだ」
「いやいやものっそいうまいっすよ!!」
「そ、そうか…」
（味は変わらないのか？って違う違う）
脱線しそうになる会話を堪え、アインズは自分が今一番ほしい情報を手に入れるため、自身の内側に集中する。
（えーと、確かこんな感じに……はあ!!」
「!!ガフッガゲフゲフ!!オフ!!」
突然のアインズの絶叫に、龍之介は思わずクラムチャウダーが器官に入りむせ返る。
「ああすまん!!」
「ゴフ！……いきなりどうしたんですかキャスターさん…？」

「……マスター、君は私のステータスが見えるのだね？」
「えと……Ｂとかって出てきてるやつですか？」
「そうそれだ!!」
アインズはビシっと龍之介に指を向け、何やら深刻な空気に龍之介も生唾を飲み込む。
「……今から私はマスターに幾つか情報を見せる。そこで私の見間違いかどうか確認してほしい」
「は、はい!!わかりました」
「うむ……では行くぞ」
沈黙がその場に降りた……。

※??内はアインズが掲示していない箇所
『ステータス』
マスター：雨生龍之介
クラス：キャスター
真名：アインズ・ウール・ゴウン？（モモンガ／鈴木悟）？
性別：男
身長：１７７㎝
体重：５０kg
属性：中庸・悪
筋力Ｂ　魔力ＥＸ
耐久Ａ　幸運Ａ＋
俊敏Ｂ　宝具Ｅ
『クラススキル』

陣地作成…―
魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。
宝具自体が陣地を形成するもので、スキル自体失われたが、このサーヴァントの魔術は、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。
道具作成…―
魔力を帯びた道具を作成できる。
宝具自体が道具を作成することが出来るので、スキル自体失われたが、このサーヴァントの魔術は、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。
『固有スキル』
真性の怪物：Ａ＋＋＋
後世に語り継がれ、信仰で歪んだ姿ではない元来の姿。
幸運・宝具以外のステータスが大幅に上昇するが、このサーヴァントは取り分け魔力が最も上がる。
このスキルが高ければ高いほど、人から外れた精神と肉体になり、英雄に対して受ける攻撃が大きくなる。
神性：―
神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。
このサーヴァントは、ある世界で全ての人々からの信仰により神性を得たが、このサーヴァントに信仰心を持つ者が、この世界では少なすぎる故、スキルは失われた。
カリスマ？（偽）？：Ａ（Ａ＋＋）
人々を非常に魅了する？演技に長けた技術？。
？ナザリックの運営のため、日夜重ねた修練の賜物。しかし現在、それを見せなければいけなかった、また補佐をしていたナザリックの僕たちが居らず、現在著しく低下。一時的にランクＡ＋＋には出来るが、長時間の場合補佐が必要。居なければ演技であるとばれる。同ク

ラス以上の看破、またはカリスマスキルが無ければ見破れない。？

専門百般…―

多方面に発揮せれるとされた天性の才能。

このサーヴァントは万能の天才と強く信仰され、それがやがて元々持っていない技能にまで、持っているということにされたことで発生したスキル。このサーヴァントの扱う専業スキルは、存在するどの技能形態にも属さないため不明な点は多く、それ故ランクは不明であるが、技能の行使自体は出来る。

└芸術審美：C

芸術作品、美術品への執着心。

専門百般内で元々持つ、唯一ランクが分かる技能。

芸能面における逸話を持つ宝具を目にした場合、高い確率で真名を看破することができる。――が、このサーヴァントの知識には、この世界の芸術作品に対する知識が少なく、真名を看破することはほぼ出来ず、物の良し悪しが分かる程度しか意味がない。このスキルは専門百般として数える。

魔導百般…―

あらゆる魔術、呪術に関する技能が発揮されるとされた、驚嘆すべき魔導の才能。

多くの人々に魔導王と呼ばれ、この世の全ての魔導に通じると強く信仰されたことで発生したスキル。このサーヴァントの魔術が、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、スキル自体失われているが、それ故あらゆる魔術に関する技能の行使が、ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。

└死霊術…―

霊魂や死体などを操る隔絶した魔術の才能。

このスキルは魔導百般内でも元々持っており、隔絶して高い。このサーヴァントが数ある魔術の中でも、取り分け最も得意とした魔術である、しかしこの魔術は、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。このスキルは魔導百般として数える。

└Tｈａ ｇｏａｌ ｏｆ ａｌｌ ｌｉｆｅ ｉｓ ｄｅａｔｈ：―

――――あらゆる生あるものの目指すところは死である。

この魔術スキルは、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、スキルの行使自体は可能である。このスキルは死霊術として数える。

星の支配者：―

超越者としての、全てを支配下に置いた力。

星ひとつを征服したことにより、その星から力を取り出すことが出来る。原初の一（アルテミット・ワン）の上位互換。

しかし力を取り出す星が、この世界で確認されない故機能していない。

『宝具』

☒魔王の財宝【ゲート・オブ・ナザリック】☒

ランク：―

種別：召喚宝具

レンジ：―

最大補足：惑星一つ

アインズ・ウール・ゴウンが集めた至高の財と、それに繋がる☒至高なる四十一の指輪【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】。

至高の四十一人か、☒至高なる四十一の指輪【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】☒の所持を許された者のみ、それらを納めた宝物庫の空間とを繋がる黒い靄を生み出すことが出来る。

ある世界を手中に収めたことにより、その世界自体がアインズ・ウール・ゴウンの財となった結果、ナザリック地下大墳墓の土地を中心とし、そこから魔力が続く限り、理論上、どのような時間軸であっても、支配した惑星を召喚することも可能である。因みに月は衛星として別で召喚できる。

ナザリックに所属する全ての生命体も財として含め、その総数は無限と言ってもよく、過去・現在・未来に至るまで、その世界に住む存在が作り上げることが出来る、全ての物がナザリックの財となり、そ

れゆえその宝物庫には、その世界に住む存在が生み出した物であれば、遥か超未来に生み出すものまでも全て保有している。
使用する場合、黒い靄のような物体が、召喚するものの大きさになって現れ、そこから抜き出す、落とす、攻撃させるなど可能であるが、この靄自体はただ宝物庫と繋げる機能しかない。
しかしこの世界にはナザリックの財があったという情報もなく、また聖杯はこの宝具の使用を認めず、ランクも不明である。
☒七頭宝蛇の至高なる杖【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】☒
ランク：—
種別：対人宝具
レンジ：1～30
最大補足：1人
由来：アインズ・ウール・ゴウンを象徴する黄金の杖。
この杖自体、使用者の魔力増強、対魔力、魔力回復など様々効力を持ち、それ以外にも攻撃的な物も数多く、恐るべき強力な力を宿している。
しかし、この杖の真の能力は、対象のナザリック地下大墳墓への強制召喚である。
☒七宝蛇の至高なる杖【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】☒は、使用者はナザリックのリーダーである。その結果、使用者はナザリック地下大墳墓に対して絶対的なリーダー権限を持ち、ナザリック内を意のままに操ることが出来ることで、対象の空間と、ナザリック地下大墳墓の好きな空間を入れ替えることによる、強制召喚することが出来る。
しかしこの宝具も☒魔王の財宝【ゲート・オブ・ナザリック】☒の一部であり、それ故この宝具は使用できず、ランクも不明である。
☒死王の世界珠【モモンガ・オブ・ワールドオーブ】☒
ランク：—
種別：対人宝具
レンジ：0

最大補足：1人
由来；アインズ・ウール・ゴウンに攻め入った、愚かな賊たちを屠る決め手となった。
サーヴァントの胸部分に光る赤い球。所持者によって能力が変化するが、この能力は使用者の変身。――つまりは宝具化にある。このサーヴァントの場合、特に死の側面が強く。それに沿った宝具化が行われ、世界の敵（ワールド・エネミー）と呼ばれる存在になる。
しかし、ガイア及びアラヤの介入により、現在は使用できず、ランクも不明である。
☒偽りの大英雄【モモン・ザ・ダークウォリアー】☒
ランクE
種別：対人宝具
レンジ：0
最大補足：1人
由来：情報と名声を得るため、変身で正体を隠したまま唯一無二の英雄を作り上げたのではと言われるエピソード。
自らのステータスと姿を変える、漆黒の鎧に身を包んだ戦士になり、以下の能力を得る。
筋力B　魔力E
耐久A　幸運D
俊敏B　宝具―
スキル：心眼（偽）E、騎乗E
本来なら宝具含め、全てのランクがAランク相当になるはずが、この世界では知られていない為に大幅に劣化、魔力・幸運のランクを下げたことで、本体と同程度の身体能力にしたが、宝具は失われた。
アインズ・ウール・ゴウンと同時期に現れた英雄であり、その軌跡を辿るとどうゆうわけか、本来敵対しているはずの彼らの利になる行動が多く。もしかしたら同一人物ではないかといった、根も葉もない噂が、実際にそうであったため宝具化したもの。
この宝具を展開している最中、核が破壊された場合、この宝具の消滅と引き換えにその場に復活する。

・・・・・・・・・・・・

「…………」

「…………」

沈黙。

「あ～……なんか消えてるの多いっすね」

「…………ああ」

酷い。

いやむしろ酷い。

ナンダコレハ。そう胸の底から呪詛を吐き散らすかのように、アインズは聖杯に罵倒する。

（ふざけるなよ…そりゃ予測はしていたさ当然。俺は異世界から来たからな……そりゃ色々致命的なのは分かるけど………これなぁに？なんで殆ど真っ白なの？宝具もEしかないし………、しかももっと強いみたいらしいし………、え？なにガイア？アラヤ？なんでここで出しゃばってくるの？ヤバいのそんなに？唯一魔法やスキルは難を逃れたみたいに書いてあるけどさ………それこの世界でちゃんと通用するかだよね？出来なかったら俺ここで積んでるよ？ねえ聖杯、コレちゃんとバランス調整できてるの？出来てるの？出来てんのおおおおおおおおお!!――ふう………やばい）

安定の精神抑圧のお蔭か、取り乱すのを表に出さずに済んだが、アインズにとって冷静になってからでも動揺はまだ強い。

知名度補正に加え、異世界からの召喚が、ここまで致命的に弱体化をもたらすとは、流石の賢王と呼ばれたアインズでも予測不可能であった。

（一端落ち着け……まずいいことを探そう。使える手札を確認するんだ）

アインズの、キャスター陣営にとっての確実な手札、それは……、

（……まず☒偽りの大英雄【モモン・ザ・ダークウォリアー】☒、これは一度ロストしても復活するのがいい……その場でなのがネックだが……、だけど使いようによっちゃ俺と、別に存在するサーヴァントのように誤認させることもできる。俺の動き方次第だな……、あとは俺の魔法やスキル……今確認したら職人（クラフトマン）系のスキルもあったのか……、これはまだ使えるかどうかわからないから保留として……）

Q残りは？Aわかんない

（やっべどうしよ……本気でダークネス・ストーカーの情報待ちしかいまない……、何がハア～気楽だだ!!全然気楽じゃなかったよ!!）

不幸中の幸いか、こちらの世界に適したスキルで、真性の怪物があったことで、アインズの能力値はほぼ本体並だ。しかし英雄の攻撃が大ダメージ必死だと、決して良かったとも言えないが……。

（聖杯が確実に俺を殺しに来てる件……）

「ガツガツガツ……ふう～、ごちそうさまでした!!」

「ああ……お粗末様……」

何と龍之介、テーブルにあった料理を全て平らげてしまった……だがアインズはそれどころではない、本当に崖っぷち、初日でこうも崖っぷちなのは歴代で初めてではないだろうか？そう思えるくらいアインズはいま凹んでいる。これでダークネス・ストーカーの持ってきた情報で、ユグドラシル魔法がこの世界では少なくとも英霊に対し、全く意味をなさなかったら、本当に積だ。マジックキャスターのアインズではどうすることも出来ない。

「んーし!!そんじゃキャスターさん！作戦ねりましょ!!」

「……ん？」

こいつは何を言っているのだ？さっきのステータスを見ていなかったのか？

アインズは苛立つ自分を押さえつけ、龍之介に問う。

「……マスター、今の私の魔法が、一体どこまでこの世界に通用するのか不明なのだ。だからこそ、先ほど情報収集に当たらせたダークネス・ストーカーの持ち帰った情報もなく、今一体どのような作戦を立

てられるのだ？」
ちょっと強く言い過ぎたかなとも思うが仕方ない。本当に今は待つしかないのだ。
少しばかり拗ねていても罰は当たらんだろう。
「ん～？そうっすかね？俺は今でもやること多いと思いますけど」
「……とっいうと？」
アインズは伏せていた顔を持ち上げ、龍之介を見る。
その顔は晴れ晴れとして、今の自分に出来ないことは無いと言わんばかりの顔つきだ。
「例えばっすよ？聖杯の知識である程度地形を知ってるって言っても、それは大まかな地形でしかないでしょ？キャスターさんをここまで連れてくるのだって、一応俺の案内があってだし」
「まあ……確かに…」
実際、聖杯からの知識からでは限界があった。龍之介のように下水道の構造を把握しているわけではないのだから。
「それに俺、ここいらじゃ有名人ですよ？追い回されない様に色々知ってるんすよ」
「……ああそうか」
龍之介はこの冬木で数多くの殺人を犯している。それでもなお捕まっていないのは、それだけ逃げるのが上手いということ、それには地理上では把握できないような、龍之介自身のオリジナルルートも数多くあるだろう。
「それに、誰にも気づかれない殺し場所ってんならある程度把握できますから、そこを重点的に見張ってれば、相手を先に見つけれるし、人の隠れそうな場所も検討付きますよ」
「……」
流石にこういったスキルに、アインズは舌を巻く。
１９９０年代の警察を今の今まで巻いているのは伊達ではないのだ。
「それにキャスターさんって、んーとあれだ……、ドラファンにててくる……、そうそうテレポート!!」

龍之介がやったことのあるゲーム、ドラゴンファンタジー、そのゲームには街から街に、一瞬で移動する魔法があった。
「テレポートとか使えますか？」
「ふむ……出来るが……」
「だったらやりようはいくらでもあるじゃないっすか！サーヴァントじゃなくて、人間狙いのテレポート暗殺作戦!!」
「!!」
考えてもいなかったことだ。
アインズが相手にしていたのは英霊たちだ。いやそれは間違っていない、マスター狙いなら常にいるサーヴァントが邪魔だからだ。しかしテレポートでやったとしても、はたして魔術師に通じるか……、
「……ああそうか、別に魔法で攻撃しなくてもいいのか」
そうだ。アインズの肉体は人間をはるかに凌駕するサーヴァント、少なくともステータスではB程度あれど、直接殴るだけでも人間なら即死するだろう。
（ふふふ……そう考えてきたら希望が湧いて来たな）
「ありがとうマスター、どうやら少々詰まらないことで凹んでいたようだ」
「ん？いやいや全然、キャスターさんは神様ですからね!!」
「……その神様っていうのは何なんだ？」
アインズは気になっていた。
龍之介はアインズを神と崇めている。まあ前の処もそうであったのだが、いきなり召喚して神様と言ったのは少し気になる。
「？神様は神様っすよー、俺たちを愛してくれる存在！俺神様は絶対居ると思ってて、だってそうじゃなきゃとっくに俺たちのこと見放してるじゃないっすか？でもそうじゃない。神様は俺たち人間を愛して愛して愛してるから、辛い話、嬉しい話、悔しい話、笑える話、いっぱいいっぱい、そう言った脚本を書いてるんですよ!!そりゃそこまで人に尽くしてくれるんなら、俺だって嬉しいと思うし、特にキャスターさんはその中でも死の神様!!俺が一番会いたかった神様!!人の死をもっと知りたかったから、俺はキャスターさんと出会えたんです

よ!!だから俺……」
一息に喋った龍之介はそこで間を置き……
「……キャスターさんに出会えてほんとによかったです!!はい!!」
元気いっぱい、子供のような無邪気な顔で、そう力強く叫ぶ。
龍之介は本来、もっと無気力な人間だ。それがここまで情熱的に語るのだから、今の彼の心情は察せずともわかる。
「……」
アインズはなぜか、このマスターに対してどうして警戒心を抱かないのか、なんとなくわかった。
ここまで信頼されて、いつまでも辛気臭くなっているなんて、かつての仲間にも申し訳ないだろう。
「……うん、そうだな、そうだ」
アインズは三度、龍之介を見つめ頷く。
まだ終わっていない、そもそも始まってもいない。
ならばここで挫けてどうする。お前はアインズ・ウール・ゴウンなのだろう。
そんなのでその名を名乗ろうとは、ギルドメンバーにあった時、何と言われるかわかったものじゃない。
「よし…マスター、君の意見を聞かせてくれ。現状私たちの取れる手段について語ろう」
「ハイっす!!さし当り、さっきの壁みたいなのは俺にも利きましたし～、完全にキャスターさんの魔法は利かないって訳じゃないと思うんすよ!だから他にももっと色々試すべきかと!」
「うん、そうだな、確かにそのとうりだ。よし、ならば一応ここでも使って大丈夫そうな物を――――――」
「?キャスターさん」
急にアインズの動きが止まる。
訝しんだ龍之介が心配そうに問いかけると……。

「…………ダークネス・ストーカーの反応が消えた」

・・・・・・・・・・・・・

ｓｉｄｅ遠坂邸

暗闇の追跡者（ダークネス・ストーカー）は朝日を避けるように、木々の木洩れ日を縫うようにして、遠坂邸にまで近づいていた。

ダークネス・ストーカーの主である、至高の王からの命により、この追跡者はまず、御三家に内の一つ、遠坂に接触を試みたのだ。

遠坂や間桐、アインツベルンに関して、聖杯か、はたまた偉大なる主のお蔭か知らぬが、聖杯戦争の知識は概要だけなら知っていた。

残り二体も、アインツベルンは距離的問題で弾かれ、間桐と教会に行っている。

遠坂邸の中庭。

そこまで来て、暗闇の追跡者（ダークネス・ストーカー）は、ここに貼られている結界を鼻で笑った。

（ナンダコレハ、ヒョウシヌケダ）

事実、この程度の結界、ダークネス・ストーカーの能力、『影渡り』で無視できる。

ダークネス・ストーカーは、自身の影の中、または別の、木々の影などに潜り、日が当たらない中でなら、一定時間移動できるのだ。

ダークネス・ストーカーは、日の当たりで屋敷の右半分が陰になっているのをいいことに、そのまま直進していった。

屋敷の扉まで数十メートル。十分時間内に侵入できる長さだ。

（アトハソノママジョウホウヲモチカエルダｋ――――ッ!!!）

それが油断となったのか。ダークネス・ストーカーは直前になって殺気に気づいた。
ドゴオオオン!!!
ダークネス・ストーカーが居る影の上、そこには噴煙が舞い、黄金に輝く一人の英霊が先ほど放った槍の暴虐の結果を、何やら古い銅鏡片手に繁々と、興味深げに眺めていた。
『王よ!!どうなされたのですかこんな朝早く!!襲撃ですか!?』
驚いたのはそこの主、遠坂時臣であった。
つい先ほどアサシンの退敗を偽装したばかりに関わらず、いつになく早くに居なくなった、自身の召喚した最強にして、もっとも扱いの難しいサーヴァント、ギルガメッシュが、急に中庭に向かって王の財宝を放ったのだ。
隕石でも落ちたかのような惨状。
時臣もなぜ、そこは結界が張られて、神秘の秘匿はできたものの、戦争は夜に始まるのに魔術の秘匿も知らないものが来たのか?と思うのも無理はなかった。
「…煩いぞ時臣よ」
そういって切って捨てる態度だが、それ以前に王の財宝の射出した槍のほうが爆音だ。まあこの程度、ギルガメッシュにとって挨拶のようなものだが。
「……それよりも時臣、我の目を使うこと許す。これを見よ」
『…っ!!こ、これは!!』
時臣は驚きの声を上げる。無理もない、ギルガメッシュは傲岸不遜と言うほかないほど、我が強すぎる人物だ。それが自信を介して共感知覚を使わせる……事はとてつもなく異常なことだ。
そこに『影渡り』の一定時間を超え、水面に浮かび上がるように、ダークネス・ストーカーが現れたことで確信に代わる。
『アサシン!!いや違う!?生きる屍(リビングデッド)か!!なぜここに!?』
アサシンは自身を個別に分身する宝具を持つ。故に、アサシンのマスターと同盟関係の時臣は、それを用いて同盟の決裂を偽装。アサシンが負けたと見せかけ、情報収集能力に長けたアサシンの独壇場を作

り上げようとしたのだ。
ならばこれは何だ。アサシンのマスターが独断で？いや違う、明らかに英霊としての定義から外れた怪物だ。しかし何故アサシンが退敗したと見せかけたこのタイミングで？
時臣の混乱をよそに、ギルガメッシュはダークネス・ストーカーに間髪入れず、拘束用の宝具を召喚した。
ダークネス・ストーカーはこれに対応、紙一重で回避する。
『ッつ!!』
「ほう……」
拘束用の宝具を回避した。その反応は両者異なる。
時臣はギルガメッシュの攻撃を回避した、この謎の生きる屍（リビングデッド）に恐怖し、ギルガメッシュはさらに、その瞳に未知の興味を抱いた。
「――――」
ナンタルシッタイダ…。
ダークネス・ストーカーは自身の愚鈍さに怒りを覚え、偉大なる主に矮小な脳みそから考え付く限りの懺悔の言葉を唱える。しかしそれは一瞬、彼には主から申し付けられたもう一つの命がある。それは……。
「ぬ!!貴様何時までしている!!奴のステータスを見よ!!」
『…ハッ!!』
「早くせよ!!」
驚きのあまり、一瞬時臣は反応出来なかったが、ギルガメッシュからの叱咤で、パスで繋がった、共感知覚を使う。
一体相手は何者なのか？ただのリビングデッドでないのは確実。では一体……。
「――――」
「させるかネズミ!!」
ギルガメッシュが放った拘束系宝具は、先ほどの比ではないほど大量に、ダークネス・ストーカーに向かって放つ。しかし――――
ザシュッ

「……チッ！死に逃げられたか」
あと一歩、ほんの少しの差で、ダークネス・ストーカーは自身の首を跳ねた。
空を切っていく首は、まるで太陽に当たった吸血鬼のように、砂となって消えてゆく。それにつられやがて体も砂となり、残されたのは巨大なクレーターと、黄金のサーヴァントだけであった。
「ふん……おい時臣、どうだ？」
『――ありえない』
「お前の意見などどうでもよい、それよりも早く教えろ、ステータスはお前たちでしか見れんのだからな」
ギルガメッシュは時臣に、先ほど謎の襲撃者のステータスの開示を要求する。
『……王よ、初めに言っておきます。私たちマスターの目は、ある程度サーヴァントのステータスが分かるようになっていますが、先ほどの物はアサシンではないのは明白…されど他のサーヴァントではなく、見えるということは、何かしら別のサーヴァントが関係して――』
「そんな物わかっておるは、十中八九宝具か何かだろう、我はそのステータスを知りたいのだ」
『……は』
時臣は、ステータスを掲示した。

ステータス
性別：男
身長：１７５㎝
体重：６５kg
属性：秩序・悪
筋力Ｃ　魔力Ｂ
耐久Ｄ　幸運Ｅ
俊敏Ａ　宝具―
「…これだけか？」

『はっ!!流石にこれ以上の看破は難しいかと…』
「そうか……ならば推測ではあるが」
ギルガメッシュは手元の銅鏡をのぞき込む。
「……奴は少なくとも、気配遮断をAクラス相当保持していたということか」
『!!』
時臣はさらに、体に電流が走ったかと思うほどの衝撃を受けた。
『お、お待ちください王よ!・なぜそのような結論に?』
「ふん、まだわからぬか。我が夜に空気が変わったと思い、気まぐれで銅鏡を見なければ貴様の首が飛んでいたやもしれんのだぞ?これがどうゆうことか、わからぬ頭ではあるまい」
『ッ!!!!』
宝具を使わなければ見つけられないリビングデット、そんなもの軽々と使い魔のように使い潰すのは一体。時臣のように偽造工作としても使えないのにどうして……。
『まさか…』
「十中八九量産できるか、アサシンのように分れる、我と同じで多数所有している……まあ宝具か何かだとは思うが…さて、どんな顔か拝んでやるとしよう」
『!?王よ、おやりになるので!』
「当たり前だ、この我が興味を持ったのだ。可能性として、あれほどの準サーヴァント級の物を使い潰してきたなら、まだまだあると踏んでいいだろう。そんな出鱈目、この我一人で十分だというのに……その面の厚さが気になったまでだ」
ギルガメッシュは銅鏡を掲げた。
「さあ、見せてみよ。薄汚いネズミをよこして来た痴れ者よ!」
銅鏡は先ほどまで曇っていたが、一瞬にして磨き上げられた鏡へと変わった。
「さて……どんなものか……」
『?・どうなされました王よ』
時臣の声に反応せず、ギルガメッシュは眉間に皺を寄せたまま、も

う一度銅鏡を掲げた。
「……どういうことだ」
映し出されない。
出てくるのは全く意味のない場所。
草陰、公園、工場、ビル内、橋下、そして下水道――
「……」
〝コンクリートの壁〟しか写さない銅鏡に、ギルガメッシュは無意味と知ると投げるように宝物庫に戻した。
『お、王よ……一体どうなされ――』
「……探知に引っかからん」
『そ、それは……』
思案顔のギルガメッシュは、珍しく真剣に、この聖杯戦争で何が起きているか考えを巡らしていた。そして……
「……ふふふ、はははははははは!!」
『?!』
急に笑い出したギルガメッシュに、時臣は驚いた。
自分のサーヴァントはこのような性格であったか？一体何があった？
「くくく……時臣よ」
『!?は、はッ!!なんでございましょう!!』
一体何の前触れか、ギルガメッシュは意味ありげにこういった。
「――此度の戦争。遊びはないやもしれんぞ」

ネタバレ・ステータス『キャスター』

『ステータス』
マスター：雨生龍之介
クラス：キャスター
真名：アインズ・ウール・ゴウン？（モモンガ／鈴木悟）？
性別：男
身長：１７７㎝
体重：５０kg
属性：中庸・悪
筋力Ｂ　魔力ＥＸ
耐久Ａ　幸運Ａ＋
俊敏Ｂ　宝具Ｅ

『クラススキル』
陣地作成：―
魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。
宝具自体が陣地を形成するもので、スキル自体失われたが、このサーヴァントの魔術は、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。
道具作成：―
魔力を帯びた道具を作成できる。
宝具自体が道具を作成することが出来るので、スキル自体失われたが、このサーヴァントの魔術は、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。

『固有スキル』
真性の怪物：Ａ＋＋＋
後世に語り継がれ、信仰で歪んだ姿ではない元来の姿。
幸運・宝具以外のステータスが大幅に上昇するが、このサーヴァントは取り分け魔力が最も上がる。

このスキルが高ければ高いほど、人から外れた精神と肉体になり、英雄に対して受ける攻撃が大きくなる。

神性：―

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。

このサーヴァントは、ある世界で全ての人々からの信仰により神性を得たが、このサーヴァントに信仰心を持つ者が、この世界では少なすぎる故、スキルは失われた。

カリスマ？（偽）？：Ａ（Ａ＋＋）

人々を非常に魅了する？演技に長けた技術？。

？ナザリックの運営のため、日夜重ねた修練の賜物。しかし現在、それを見せなければいけなかった、また補佐をしていたナザリックの僕たちが居らず、現在著しく低下。一時的にランクＡ＋＋には出来るが、長時間の場合補佐が必要。居なければ演技であるとばれる。？同クラス以上の看破、またはカリスマスキルが無ければ見破れない。

専門百般：―

多方面に発揮せれるとされた天性の才能。

このサーヴァントは万能の天才と強く信仰され、それがやがて元々持っていない技能にまで、持っているということにされたことで発生したスキル。このサーヴァントの扱う専業スキルは、存在するどの技能形態にも属さないため不明な点は多く、それ故ランクは不明であるが、技能の行使自体は出来る。

└芸術審美：Ｃ

芸術作品、美術品への執着心。

専門百般内で元々持つ、唯一ランクが分かる技能。

芸能面における逸話を持つ宝具を目にした場合、高い確率で真名を看破することができる。――が、このサーヴァントの知識には、この世界の芸術作品に対する知識が少なく、真名を看破することはほぼ出来ず、物の良し悪しが分かる程度しか意味がない。このスキルは専門百般として数える。

魔導百般：―

あらゆる魔術、呪術に関する技能が発揮されるとされた、驚嘆すべき魔導の才能。
多くの人々に魔導王と呼ばれ、この世の全ての魔導に通じると強く信仰されたことで発生したスキル。このサーヴァントの魔術が、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、スキル自体失われているが、それ故あらゆる魔術に関する技能の行使が、ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。
└死霊術：―
霊魂や死体などを操る隔絶した魔術の才能。
このスキルは魔導百般内でも元々持っており、隔絶して高い。このサーヴァントが数ある魔術の中でも、取り分け最も得意とした魔術である、しかしこの魔術は、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、魔術の行使自体は可能である。このスキルは魔導百般として数える。
└Ｔｈａ ｇｏａｌ ｏｆ ａｌｌ ｌｉｆｅ ｉｓ ｄｅａｔｈ：―
――――あらゆる生あるものの目指すところは死である。
この魔術スキルは、存在するどの魔術系統にも属さないため不明な点が多く、それ故ランクは不明ではあるが、スキルの行使自体は可能である。このスキルは死霊術として数える。
星の支配者：―
超越者としての、全てを支配下に置いた力。
星ひとつを征服したことにより、その星から力を取り出すことが出来る。原初の一アルテミット・ワンの上位互換。
しかし力を取り出す星が、この世界で確認されない故機能していない。
『宝具』
☒魔王の財宝【ゲート・オブ・ナザリック】☒
ランク：―
種別：召喚宝具
レンジ：―

最大補足：惑星一つ

アインズ・ウール・ゴウンが集めた至高の財と、それに繋がる⊠至高なる四十一の指輪【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】。

至高の四十一人か、⊠至高なる四十一の指輪【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】⊠の所持を許された者のみ、それらを納めた宝物庫の空間とを繋がる黒い靄を生み出すことが出来る。

ある世界を手中に収めたことにより、その世界自体がアインズ・ウール・ゴウンの財となった結果、ナザリック地下大墳墓の土地を中心とし、そこから魔力が続く限り、理論上、どのような時間軸であっても、支配した惑星を召喚することも可能である。因みに月は衛星として別で召喚できる。

ナザリックに所属する全ての生命体も財として含め、その総数は無限と言ってもよく、過去・現在・未来に至るまで、その世界に住む存在が作り上げることが出来る、全ての物がナザリックの財となり、それゆえその宝物庫には、その世界に住む存在が生み出した物であれば、遥か超未来に生み出すものまでも全て保有している。

使用する場合、黒い靄のような物体が、召喚するものの大きさになって現れ、そこから抜き出す、落とす、攻撃させるなど可能であるが、この靄自体はただ宝物庫と繋げる機能しかない。

しかしこの世界にはナザリックの財があったという情報もなく、また聖杯はこの宝具の使用を認めず、ランクも不明である。

⊠七頭宝蛇の至高なる杖【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】⊠

ランク：―

種別：対人宝具

レンジ：1～30

最大補足：1人

由来：アインズ・ウール・ゴウンを象徴する黄金の杖。

この杖自体、使用者の魔力増強、対魔力、魔力回復など様々効力を持ち、それ以外にも攻撃的な物も数多く、恐るべき強力な力を宿している。

しかし、この杖の真の能力は、対象のナザリック地下大墳墓への強制召喚である。

☒七宝蛇の至高なる杖【スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】☒は、使用者はナザリックのリーダーである。その結果、使用者はナザリック地下大墳墓に対して絶対的なリーダー権限を持ち、ナザリック内を意のままに操ることが出来ることで、対象の空間と、ナザリック地下大墳墓の好きな空間を入れ替えることによる、強制召喚することが出来る。

しかしこの宝具も☒魔王の財宝【ゲート・オブ・ナザリック】☒の一部であり、それ故この宝具は使用できず、ランクも不明である。

☒死王の世界珠【モモンガ・オブ・ワールドオーブ】☒

ランク：—

種別：対人宝具

レンジ：0

最大補足：1人

由来；アインズ・ウール・ゴウンに攻め入った、愚かな賊たちを屠る決め手となった。

サーヴァントの胸部分に光る赤い球。所持者によって能力が変化するが、この能力は使用者の変身。——つまりは宝具化にある。このサーヴァントの場合、特に死の側面が強く。それに沿った宝具化が行われ、世界の敵ワールド・エネミーと呼ばれる存在になる。

しかし、ガイア及びアラヤの介入により、現在は使用できず、ランクも不明である。

☒偽りの大英雄【モモン・ザ・ダークウォリアー】☒

ランクE

種別：対人宝具

レンジ：0

最大補足：1人

由来：情報と名声を得るため、変身で正体を隠したまま唯一無二の英雄を作り上げたのではと言われるエピソード。

自らのステータスと姿を変える、漆黒の鎧に身を包んだ戦士にな

り、以下の能力を得る。

筋力Ｂ　魔力Ｅ
耐久Ａ　幸運Ｄ
俊敏Ｂ　宝具―

スキル：心眼（偽）Ｅ、騎乗Ｅ

本来なら宝具含め、全てのランクがＡランク相当になるはずが、この世界では知られていない為に大幅に劣化、魔力・幸運のランクを下げたことで、本体と同程度の身体能力にしたが、宝具は失われた。

アインズ・ウール・ゴウンと同時期に現れた英雄であり、その軌跡を辿るとどうゆうわけか、本来敵対しているはずの彼らの利になる行動が多く。もしかしたら同一人物ではないかといった、根も葉もない噂が、実際にそうであったため宝具化したもの。

この宝具を展開している最中、核が破壊された場合、この宝具の消滅と引き換えにその場に復活する。

波紋その1

ダークネス・ストーカーは教会で、目ぼしい資料を漁り終え、今しがた帰ろうとしていた。
彼が今持っている資料は、過去行われた聖杯戦争の概要。生憎魔術についての資料は無かったが、それは別の同胞達に期待しよう。
ダークネス・ストーカーは、誰にも一切感づかれることなく、自分の技術が見破られることは無いと、確信している。何せ彼はあの偉大なる主に作られたのだから……。
しかし、それは同じ技能を持ったものにも言えるのだろうか？
「……行ったか」
「そのようで」
冬木市教会。
その神聖な十字架が飾られる屋根に、二つの影があった。
片方は鍛え抜かれた体をカソックに包んだの神父、もう片方は、全身黒ずくめで骸骨の仮面を被った女。
両者黒ではあるが、異なる雰囲気を醸し出していた。女はアサシン、気配遮断Ａ＋クラスのスキルを持ち、分身のアサシンたちが事前に知らせていたことで、今しがた去っていくダークネス・ストーカーを運よく補足することが出来たのだ。
「……師父に連絡をする。アサシン、お前たちはアレの追跡を」
「御意に」
男は女に命じると、女は朝日を背に駆けて行った。
男はすぐさま、驚異的な身体能力を持って屋根から音もなく飛び降りる。
一切の怪我を見せないのは、この男が長年の鍛錬の賜物の故だろう。
「……さて」
男、言峰綺礼は誰にも見つかってはいけない。
アサシンは気配遮断があるので大丈夫だろうが自分は違う。
先ほどはアサシンの近くに居たが故に、相手に気づかれることなく

貴重な物の回収、遠坂時臣と未だ繋がっていると思われるもの、それら全てを隠すことが出来たが、今は中立地帯の教会とは言え、一体誰が自分の姿を見ているやもしれんのだ。早急に見つかる前に隠れなくては。

「………隠した物品の回収より先に報告か」

まさか自分がアサシンを、偽装とは言え嗾けたその日にこんな事態が起こるとは、予想だにしていなかったことだ。

謎のサーヴァントとおもしき存在。

アサシンに近いが、当のアサシン自体が綺礼のサーヴァントであり、あれが何ののか予想がつかない。

これは師父と仰ぐ遠坂時臣に判断して貰う他ないと、綺礼は思う。

本当なら、教会の中立地帯を犯したとして、問答無用に捕獲なり、破壊なりやっておきたかったのだが、相手のスペックが、分裂したアサシンでは到底太刀打ちできない存在だ。人間である綺礼が出来るわけもないし、今彼は隠密に情報収集しなければならない立場。

結局のところ、こうやって相手に渡ったら拙い物を隠し、あとは隠れ潜んでいるしかなかったのだが…。

「……奴は一体何のために?」

不可侵の教会に入ってまで一体何を……。

綺礼がその後、聖杯戦争に関する資料が無くなったと気づいたのは、時臣と情報交換した後のことであった。

・・・・・・・・・・・・

ハイアットホテル最上階。

全室を貸し切って作られた魔術工房は一級のもので、この工房を作り上げたものが一流の腕だとわかる。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。彼こそこの工房を作り上げた、時計塔きっての天才魔術師にして、恐らくこの聖杯戦争で参加し

ているマスター中、最も〝魔術戦が強い〟マスターだろう。
「……」
彼は今仮眠をとっている。
妻にして最愛の人物、ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリも　また同じである。
彼らは夜に行われる聖杯戦争のために、こうやって朝に眠りにつき、夜に動く。基本的なマスターの動きだ。ただ妻のソラウは、魔力供給という、ランサーを顕現させておくため、戦前に出る必要はない。故に彼女は、ケイネスが聖杯戦争の為、あと二、三時間の仮眠しか出来ないが、彼女は未だ寝りにつている。
だからだろう。ケイネスはまだ予定時間より早く目を覚ましたというのに、彼女を起こさない様に部屋を後にした。
「……ランサー」
「ここに」
ケイネスが呼びかけると、どこからともなく二双の槍を持った、絶世の美男子が現れる。
彼こそが、今回の聖杯戦争で、ランサーのクラスで呼ばれたディルムット・オディナである。
「……先ほど使い魔からの連絡で、また遠坂邸で動きがあった」
「それは!……またあそこに襲撃をかけた者がいると?」
「ふん……、それが本当なら魔術の秘匿も知らぬ三流以下が……っと切って捨てたところだがな」
「……襲撃ではない?っと」
「バカが違う」
ケイネスはランサーを信用していなかった。
それもそのはず、ランサーは愛の黒子と言うスキルを持ち、異性に対し無条件で好意を持たれると言う物だ。
これにより、最愛の妻ソラウは現在ランサーにゾッコン、それはそれは真意でなくとも、ケイネスにとって面白くない話だ。
それに合わせランサーは、聖杯に託す願いは無く、ただ忠義を尽くしたいと言っている。うさん臭いにも程がある。だからケイネスラ

ンサーを信用しなかった。
しかし戦力的意味でなら信頼している。話をするのも嫌だが、ランサーが居なければ、ケイネスは決して聖杯を持ち帰り、己の輝かしい経歴の中に、武功を納める事もできないのだから。
「襲撃者が問題だ」
「っと言いますと」
「……アサシンかもしれん」
「ッ!!馬鹿な!!アサシンはもう敗退したはずでは!!」
「声が大きい！ソラウを起こすつもりか！」
「も、申し訳ございません…」
出来る限り抑えた声で叱りつけるケイネス。ランサーは自分の気遣いの無さに萎れていた。
「全く……、貴様とは口を利くのも癪だが、聖杯戦争に勝に抜くには戦略を練らんといかん。そこで……ランサー、貴様はこれをどう見る？」
ケイネスとしても、ランサーから教えを乞うには嫌だ。だが相手は百戦錬磨のケルトの英雄、ディルムット・オディナだ。戦いのことなら自分より心得があると、ケイネスは今回ランサーを呼び、これから行う〝釣り〟について、指針を決める必要が出たからだ。
「……そうですね」
ランサーは一度深く考え込むと、幾つかケイネスに質問をした。
「……アサシンと申しましたが、それは本当にアサシンだったのですか？」
「……」
ケイネスとしてもそこが気がかりだった。使い魔越しからの監視では、マスターに与えられるステータスの表示、これが使えないからだ。
気配遮断が有ったようなのでアサシンと言ったが、殺されたアサシンとおもしき者も、実際は風貌など見ることが出来ないうちに殺された。そもこんな朝早くから動きが有るはずがないと踏んでいたこともある。それに前回のように派手ではない、一瞬の出来事故、全ての

行動を見ることは出来なかった。ただ…
「確かに……確証は無いが……そういえば遠坂のアーチャーは何やら、あの謎のサーヴァントを捕えようと必死だったな」
「？それは」
「まあ結局、捕えきれずに自害させられたがな、全く一体何がしたいのやら……」
「……」
ランサーは黙したまま、何やら考え込んでいる。
ケイネスも流石に今回の一件は、情報の少なさもあるが向こうの動きが全く読めないとも言えた。
アサシンの敗退後、すぐさま別のアサシンとおもしき存在が遠坂邸に襲撃、それは朝早くに起こったことで対応に若干遅れ、全体を全て把握する前にアサシンの自害で終わる、これが全てだ。
これがよっぽどのキチガイならわかるが、敵が放った存在が、もしも正規のサーヴァントでないにしても、アーチャーの攻撃を躱す様な、そんな存在をこんな場面で使うとも考え難い。となると…
「……まだそのようなサーヴァントがあると」
「……恐らくはな」
どのクラスかはわからないが、宝具を用いたサーヴァント召喚系の物の可能性はある。
姿はアサシンでも、アサシンは夜中に敗退。ならあれは全く別の物と考えた方が好い。
「仮にアサシンが……宝具か何かでまだ現界しているとしたら？」
「ありえんぞランサー、それならなぜもう一度襲撃などした。それもこんな朝になど」
「……」
「確かに宝具があって、まだアサシンが居たとしよう、だがそれではまるで辻褄が合わん。分身する宝具があったのなら、アサシンが死んだとする偽装のなら一度でいい、そのため夜の、それもよく分かりやすく派手に……」
はたと、ケイネスは気づく。

アサシンが敗退したとわかった状況。今しがた自分が言ったことと正しく同じではないか？
「……可能性の話です。戯言と取ってもらって「いや、あるかもしれん」――っと言いますと？」
ランサーの話を遮り、ケイネスは自分の仮説と説く。
「今回、アサシンのマスターは遠坂の弟子であった。だが聖杯の証である令呪が出たことにより、我欲に眩んだアサシンのマスターは離反、そのままアサシンが召喚されると同時に襲撃……おかしいと思わんか？」
「はい、確かにアサシンが倒されたのは間違いないかと思われますが、そこまでのスピードが余りにも早いかと」
「そうだ、仮にも気配遮断Ａ相当の能力を持つアサシンを、なぜあんなにも早く察知し、そして倒せたか……仮に今回の朝の騒動で、アーチャーに暗殺を対策出来る物があるとみて間違いないと思うが……それでも違和感が拭いきれん。アサシンのマスターは教会の代行者…、暗殺を謀るなら直前まで同盟を装っておっけばいいものを、あのような愚かなやりかた到底やろうとも考え難い。アサシンが消えたのが間違いなかったことから疑わなかったが……今回の件で疑わしくなったな」
「それではアサシンがまだ生きていると？」
「可能性の話だ…だがその線は濃厚だな」
ケイネスは高級ソファーにどっかりと座り、頭をコツコツと人さし指で叩く。
「だが解せん、なぜ朝にあのような行動をとった？あれはアサシンの宝具で作られた存在なのか？それとも別の存在の物か？どちらにしてもなぜ……ああそうか」
「？どうなされました主」
「まだ気づかないのかランサー」
ケイネスは見下すように、自身が見つけた相手側の〝真意〟を語る。
「詰まる所、今の我々の状態を作りたかったのだよ。朝に行われた

……偽アサシンとでも名付けるが、こいつを嗾けた奴は相当な切れ者だ」
ソファーから立ち上がり、ランサーが未だ困惑な顔をいい気味に、ケイネスの舌は回る。
「アサシンの敗退……この時点では我々はそれを疑わなかった、だが向こうはそれが偽装だと気づいた。ランサー、お前はサーヴァントの召喚が出来る宝具を持っているとして、その立場ならどう思う」
時計塔にいた時のように、ランサーを出来の悪い生徒に見立ててケイネスは問うた。
「……ああそうか！アサシンが偽装死したのなら、遠坂はそれに対する対応も手薄になる！そこを突こうとしたが、アーチャーが実際に気配を察知できる存在だったので、それがとん挫した……それならなぜ遠坂に？アサシンの対応が手薄になっているのは他の陣営も同じ……少なくとも可能性として、実際にアサシンが敗退したことも考えられます。アーチャー自身もそれに対応したのも明らかならば実際の敗退も危惧して避けるのでは？なぜ敢えて遠坂陣営に？」
「簡単だランサー、たとえ両方の答えでも、向こうの目論見は達成できるからだ」
「一体それは!?」
ケイネスはコップに水差しからレモン水を注ぎ、乾いた喉を潤しながら、少し勿体ぶる言い方で話す。
中々このような機会はない故、この不出来なランサーに時計塔の頭脳を見せつける悦に浸っているのだ。
「ふふ……恐らく相手は宝具特化型だ」
自身が導き出した明確な答えに自信をもって答える。
「今回、朝方に偽アサシンを仕向けた理由は五つ。一つはアーチャーのマスターである、遠坂の暗殺だ。ここで実際に暗殺が成功していれば、危惧するのはアサシンのみ、偽アサシンが本物のアサシンと同等の気配遮断があるなら、先ほども言ったように遠坂側と教会側のマスターが繋がってでもいない限り、暗殺は十中八九成功する。ここで暗殺が失敗すれば、それはアーチャーが実際に気配遮断を看破す

ることが出来るということ。これが二つ目のアーチャーの実力の調査だ。実際アーチャーの介入によって暗殺は失敗。これによりアサシンの敗退は濃厚かと思うが、ここが味噌だ。敢えて朝方にやったことがここで利いてくる」

また水差しからレモン水を入れ、勿体ぶるように飲む。よほど今までランサーが気に入らなかったのだろう、当のランサーは聞き入っているが…。

「……アサシンがまだ敗退していないかもしれない、そう思わせるのだ」

「？なぜそれが朝方に…」

「馬鹿め、さっきの私の話を聞いていなかったのか？聖杯戦争とは夜に行われるもの、そうでなくとも神秘の漏洩を危惧すれば、自然それは夜に行われて当然だ。相手方は敢えてこれに逆らい……邪道とも取れるが私たちが気を緩ませている時間帯に襲撃をかけた。これで急に行われたアーチャー対偽アサシンの戦闘は、アーチャーの能力と、偽アサシンの僅かな情報だけで終わってしまった。だがこれでマスター間にはアサシンの襲撃が二回あったように見えただろう。これが三つ目……そして」

「……そして？」

「……今の私たちのように、此処までとはいかないが、アサシンが実はまだ敗退していないと思わせることだ。これが四つ目。ここまで来れば感のいい者なら遠坂と教会側の癒着を見抜けるだろうさ、肝心なのは、最初にアサシンが偽物ではなく、本物ではないかと勘繰りを入れることで、そこから遠坂と教会側の接点を思い出させる…、そこまで行ってしまえばルール違反を犯した教会側に圧力を他マスターで掛けることにより、アサシンの動きを封じることが出来る……うまくいけばそのままアサシンを退場させることもな……、いやしかしやられたよ。たった一手で此処まで考えつかせるとはな」

ケイネスは純粋に相手を褒め称えた。

彼がこの極東の田舎に来たのも、こういった心理戦から魔導を持ちいる決闘をしに来たためなのだ。まさか初日でここまでの手を使っ

てくるとは……中々どうして面白いっと、ケイネスが真実を知ったら、きっと羞恥死なる奇妙な死に方をしてしまうだろう。
「おお……流石我が主！その心眼感服いたします！」
「フンよせよせ…、が実際の所ここからが奴の本当の狙いだ」
「まだあると！」
ランサーもなんだか、この余りにも深読みしてしまうマスターに釣られ、本当にそんなことがと思い始めていた。てゆーか思ってる。
「これが奴の真の五つ目の狙い。奴は同盟を考えている」
「同盟……ですか？」
疑問が籠った声だ。
当然と言えば当然、相手はサーヴァントにしてサーヴァントを操る、恐らくは規格外の存在。
そんな相手が同盟を求めるだろうか？
「そもそもだ。相手側の意図としては、サーヴァントを生み出す能力と言う規格外の力なら、そこまでアーチャー、アサシン陣営に対し、あのような行動に移さなくてもよかったのだ。だがそれを行ったということは、みすみす自分の能力の一端をさらしてまで、サーヴァント二機の同盟が、非常に厄介だったということだ。これが最初に言った、宝具特化型だということだ」
当たり前だが、サーヴァントがサーヴァントを操るといった時点で、何らかの制限が課せられても可笑しくないのだ。それがああも使い捨ての鉄砲玉のように、遠坂陣営に襲撃を掛けたのは、まだ余力があるが、それが切れた時の制限が酷いということではないのか。
だからこそ、まだ余力が高い段階の、早いうちに同盟を見つけ、対アーチャー、アサシン同盟を築きたい構えではないのだろうか？
「それではもっと直接的に、同盟者になりえそうな者に声を掛けるのは…」
「馬鹿め、直接的では隠れているのに意味はないだろう。アサシンの場合だってそうだ、朝にやった行動も我々に暗殺者と言う最低限の情報を与えるだけで、それ以外、アーチャーの攻撃を凌いだとしかわからなかった。これこそ相手が相当慎重かつ大胆な戦略家で、本体自

体が脆弱な特化型サーヴァントと言う証明ではないかね？それにこれはテストなのだ」
「テスト？もしやそこまでの考えに至ったものこそが同盟にふさわしいと…」
「その通りだランサー」
やっと着いてこれたかと、ケイネスは頭をコツコツと叩く。
「恐らく相手は相当な戦略家にして、尊大な王の英霊なのだろう。同盟相手を選ぶなら、最低限ここまで考え付く相手でないと意味はないとな。どちらにしろ同盟できずともアサシンは動けなくなるのなら、だいぶ向こうとしてもやりやすいだろうな……そこまで考えての行動だと思う」
考え過ぎである。
アインズはただ単に、情報収集したかっただけだ。それがここまで勘違いさせられるとは……アインズはどこの世でも過大評価されるらしい。
「今回は同盟が目的だ。爆発力が高いサーヴァントに、持続性の高いランサーなら、向こうとしても申し分ないだろう。最初は使い魔で教会に釘を指し、見張っている相手側は私に接触を試みるかもしれん。そこで今回は釣りは無くし、コンテナ置き場にでも行って待っているとしよう」
「ハっ！」
ランサーは感激していた。
まさかここまでのことを見抜いていたとは、我がマスター誇れりと。
しかし気になるのはそのサーヴァント、一体何者なのか？
「恐らくはセイバーかキャスター、ライダーのどれかだ。アーチャー、アサシンは言わずもなが、そして本来、私が使おうと決めておった聖遺物はイスカンダルのマントの切れ端だ。どこの輩が盗んだのか知らんが、恐らくライダークラスだと思う。逸話から大軍を率いていたことがある故、これももしかしたらあるやもしれん。バーサーカーは理性が無いのでそんな器用な真似は出来ない筈だ。残る

はセイバーかキャスターだ。この三機のどちらかが必ず接触を試みてくる」
ケイネスは予測したクラス。確かに普通に考えればそうだう。
「……よし、私は早速教会に使い魔を送る。お前は暫く待機していろ」
「かしこまりました。必ずや聖杯をあなた様に……」
ランサーはそう言って、霊体となって消えてゆく。
ケイネスはただ、最後にランサーが喜んだのが気に食わなかったのか、小さく舌打ちした後、使い魔に取り掛かった。

波紋その２

どこにでもあるビジネスホテルの一室。
７０３号室の扉を一定のリズムで叩く。やつれた黒コートの男が居た。男が叩くのをやめると、何秒かしてからチェーンの隙間から、色白の端整な美人が覗き見る。
確認し終えたのか、女が鍵を外し、男を部屋へ招き入れ誰もいないかを確認した後、扉を閉めた。
「……装備品一式、全て到着しております」
冷淡な、機械的な音質で、女は男に答える。
そこの主はテロリズムにでもかられたのか、ワルサーＷＡ２０００とキャリコＭ９５０Ａ、多数の爆発物にワイヤー、ナイフ。極めつけは大口径に改造された銃、トンプソン・コンテンダー等が置かれていた。
そのような物騒極まりない代物を持っているのは誰か？それはセイバーのマスターにして、『魔術師殺し』と恐れられた人物。衛宮切嗣だ。
片腕の相棒。久宇舞弥は切嗣に、機械的にセイバーの偽マスターとして冬木に来た、アイリスフィール・フォン・アインツベルンの動向について報告する。
「マダム達も既に到着し、動き始めています。これで他のマスター達は、マダムをセイバーのマスターと思い込むことと……」
「…わかった」
「昨夜、遠坂邸で動きがありました。…記録した映像です」
ブラウン管テレビには、軍でも使用するＣＣＤカメラによって記録された映像が、ハッキリと、アサシンが倒される姿が映し出されていた。
「……この展開、どう見る？」
切嗣は、先ほどの映像に不信感を持ったのか、舞弥に意見を求める。
「……出来過ぎのように思えます、アサシンの侵入から、遠坂のサーヴァントとの攻撃までのタイムラグが短すぎます。気配遮断スキル

を持つアサシンを事前に察知できたとは思えませんし、侵入者があることを承知していたのではないかと、そう思っておりましたが……」
「……が？」
「こちらの映像をご覧下さい」
舞弥は映像を切り替え、今度は朝の時間帯の映像を見せた。
そこには遠坂邸で起きた。朝の襲撃の全貌が映し出される。
「！……これは」
切嗣が驚くのも無理はない。アーチャーの攻撃から煙が晴れると、そこに写るアサシンと思われる…いや、生きた屍（リビングデッド）は、遠坂邸が陰になっている右側から急に現れたのだ。
それだけではない。アーチャーの次の攻撃、縄などと言った拘束系の武器を用いた攻撃を寸でのところで躱したのだ。現存する死霊術師で、此処までの異常な個体を作り上げる物など居る筈がない。
切嗣の予想では、恐らく俊敏はＡを行くと見る。気配遮断もアサシンのクラスであれば申し分ない。それが……
「……自害か」
「……」
謎のリビングデッドは、アーチャーの拘束を逃れるためか、僅かに早く自分の首を跳ね飛ばし、砂となって消えてゆく。
「一切の情報も渡さないつもりの様だったが……文明の利器に救われたな」
あれ程の高位のリビングデット、もはや準サーヴァント級と見てもいいほどだ。それも躊躇いもせずに切り捨てるとは……相手マスターはよほど情報を重視する存在なのだろう。
「ＣＣＤカメラで、２４時間体制の監視を行なっていたのが幸いでした。恐らく機械を頼らない魔術師では、此処までの早朝の戦闘、まともに感知したものは少ないかと…」
「全くだ…ん？」
切嗣はテレビに映る。アーチャーの行動に注目する。
「あれは……銅鏡か？」
「はい、恐らくあれが、昨晩のアサシンと、早朝のリビングデッドを

発見した宝具かと。あれの存在がアサシンの襲撃を予期した原因だと思われます」
「……厄介だな」
切嗣は生まれつきの暗殺者であった。師と仰いだ存在からも、お前は感情と指先を切り離すことが出来ると言われたほどだ。肉体と精神を完全に制御できる男にとって、陰から狙うそのスタイルは、このサーヴァントにとって、何ら意味をなさないと言われているようなものである。
「映像は以上です。今回は昨晩のアサシンの襲撃から数時間後の早朝、明らかにアサシンの襲撃に合わせたものかと思われます。アサシンを倒した早朝の、遠坂陣営の気が緩んだ隙を突いた暗殺だったのでしょうが……、先ほど私が、アサシンの死が不自然だと思ったのと、このリビングデッドを嗾けた存在が同じ結論を持っていたのなら、あの瞬間こそ暗殺の絶好の機会だったと思ったのでしょう」
「……しかし、実際は探知系宝具の効果によって、アサシンは敗退、結果このリビングデットも塵となったか……」
切嗣と舞弥は、先ほどの映像から得られる情報を統合。そこから浮き出る疑問を切嗣は舞弥に投げかける。
「…サーヴァント戦では、英霊の正体を秘匿するのが鉄則だ。何故遠坂は、昨夜のアサシン戦のみならず、此処まで数多の宝具を使えると、みすみすサーヴァントをさらす様な真似をした？そして今度のリビングデットでは、何故あそこまで迅速に対処しようとした？」
昨夜の戦い。あれは正しく見てくださいといと言わんばかりであった。しかし今回の拘束系と思われる宝具か武器は、昨夜に比べれば数は多くない。いや、内包する神秘はこちらの方が大きいだろうか？ただ派手さで言えば、最初の一撃目の槍以外、パッとしない攻撃ばかりで、速攻で片を着けようとする様に見えた。
「……早朝の襲撃以外は見せる意図があった……と言うことでしょうか？」
「うん…恐らく朝の襲撃は、向こうにとって予想外だったのだろう。何故そうだったのかわからないが……、舞弥、アサシンのマスター

はどうなった？」
「昨夜の内に教会に避難し、監督役が保護下に置いた旨、告知されました。アサシンのマスターは言峰綺礼」
「ん……」
切嗣はその名に心当たりがあるのか、声音に緊張が走る。
「……舞弥、冬木教会に使い魔を放っておけ」
「良いのですか？教会の不可侵地帯にマスターが干渉するのは禁じられているはずですが…」
舞弥は疑問の声を上げる。それも当然、教会は冬木の聖杯の降臨の為、中立の立場として、その監視及び、神秘が人目に触れないように調整を行う立場だ。それに対し肩入れをしようものなら、監督の立場として、一体どんなペナルティが与えられるのかわからない。
切嗣にしても、アサシンの襲撃を予測できる宝具を持ったアーチャー、ただただ嫌な相手だが、それが今回アサシンの敗退が濃厚になったと、切嗣は思うのだが……
（言峰綺礼……事前情報では元代行者、大成できる能力を持ちながらそれを溝に投げ捨てるような人生を歩んできた……この男は危険だ。ここで終わるような者ではない）
「監督役の神父にばれないよう、ギリギリの距離をうろつかせておけばいい。問題はあのリビングデット……あれは一体だけかと思うか？」
「いえ……あれほどの準サーヴァント級の存在が大軍でいるとは思えませんが、それでも複数体居る可能性は高いかと」
暗殺に失敗し自害した。これが単に情報を少しでも漏らしたくない無いのだったらわかる。事実そうなのであろうが……
「……それでも遠坂を襲撃するのはリスキー過ぎる」
今回の暗殺が成功すると、相手は確信していたとしても、そうやすやすとあれほどの、サーヴァント級のリビングデッドを先兵として使うだろうか？切嗣がその立場ならきっと、実際にアサシンを打ち取ったアーチャーではなく、別のマスターを暗殺に仕向けただろう。その方が、映像に写った銅鏡のような存在があるかもしれないサーヴァン

トに、態々襲撃しなくとも、アサシンに対し手薄になっているのは他の陣営もそうなのだから、そこを狙えばいい話だ。
（アサシンが未だ敗退では無く、このリビングデッドの主人がそれを見抜いていたとしよう……なぜ遠坂に？）
アーチャーの宝具数もそうだが、謎のサーヴァント級のリビングデットを操る何者かも異常だ。
今回の聖杯戦争、何かがおかしいと、数多の戦場を渡った切嗣は直観的に理解できるが、何故ここまで初日から派手に暴れている？
（裏で何が起きている？……ん？）
切嗣は先ほどの映像を巻き戻し、丁度リビングデッドが陰から浮かび上がるところで止める。
「どうかされました？」
「……舞弥、これをどう思う」
「これ……とはこの屍ですか？」
「そうだ」
切嗣はリビングデッドのある個所に注目していた。それは…
「こいつ……忍者に似ていないか？」
「？……そう言われれば見えなくもないですが――」
生きる屍リビングデッド、その姿は真っ黒な頭巾を被り、額当ては何やら紋様が描かれている。衣装も忍び装束に見えなくもない。実際は似ても似つかない、ノリを張ったような、かなり角ばった全く出鱈目な姿だ。
映像が鮮明でないのが残念だが。実際に忍が衣装に着替える時は滅多になく、大抵はその場に紛れるため大衆と同じ服を着ていた。これはその実際の忍びとは真っ向から違う。
かなり分かり辛いが、何やら草鞋風のシューズのような、現代的な靴を履いているようにも見える。さらには腰辺りに星形の……手裏剣まであるではないか！これは映像をじっくり見なければ判らなかったから正確ではないが、決して普通でないことは分かった。
「……なんですかコレ」
舞弥もよくよく見ていくと、そのチグハグな像が浮き彫りとなって

行く。
　これを直接見たギルガメッシュは、日本の隠密家業の衣装など、聖杯が一々知識として送るはずはないし、時臣はそもそも忍者とか余り知らなく、アサシンの一種としか認識していない。西洋かぶれここに極まりである。
　綺礼も日本の生まれだが、西洋圏の教会の人間だ。忍者の衣装など、想像でしか知らないのだ。
　故にこの時、この奇妙な存在に気づいたのはセイバー陣営のみである。その事実に切嗣たちはより大きな混乱となってゆく。
「これじゃまるで、創作物に出てくる架空の忍者ではないですか!?」
「ああ……僕もそう思うが……」
（相手は創作の人物を作れるサーヴァント？シェイクスピアと言った文学史の英雄の可能性もあるのか…）
　切嗣の読みは遠からず当たっている。
　暗闇の追跡者ダークネス・ストーカーは元はユグドラシルと言う創作物のゲームが元だ。切嗣はサーヴァント自身が考えた存在を生み出せるのではと考えているが、アインズは決められたコマンドから選んで呼び出しているに過ぎない。
「聖杯戦争はその術式から、東洋の英霊は呼び出せない。必然、このリビングデッドは西洋のサーヴァントから造られた……となると」
（創作系……芸術の分野で功績を残したサーヴァント……ならクラスはキャスターか？）
　かなりいい線に迫ってきている切嗣だが、前提からして間違った思考に陥っている。
　そもそもアインズは異世界の英雄だ。真名当てクイズなる物が出されたら、問答無用で出題者に殴り掛かっても許されるレベルの答えだ。正解を当てられない切嗣を責めてはいけないし、寧ろここまで迫れたのは切嗣の洞察力の賜物だろう。
「ふう……今夜は荒れそうだ」
　ポケットから出した、もう絶版の不味い煙草に火を着ける。
　切嗣の視線は紫煙から、これから行われる戦争の先を見据えてい

た。

・・・・・・・・・・・・・・・

「ライダーライダーライダーライぶふぅ!!」
「うるさいぞ坊主、ビデオの音が聞こえんではないか」
ウェイバー・ベルベットはベットの上。
自身が召喚した英霊、イスカンダル王のデコピンにより撃沈。煙を出しながらうずくまっている。
「ってぇ?どうしたお前さん、今夜に備えて寝ていたはずであろう」
「そ、そうなんだけどさ〜」
額を抑え、涙目で答えるウェイバーは、今自分の使い魔が得た情報をライダーに伝える。
「い、今さっき、遠坂で戦闘があったみたいで」
「ほう!アサシンの襲撃から立て続けにやられるとは…相当恨みでも買っていると見る……で」
「え?」
ほら続き、とライダーは催促するが、実はウェイバー、余りにもいきなりの戦闘で、終わった辺りからしか見ていなかったのである。
「いや……実はあんまり見れなくて…」
「ぶわっかもおおおおん!!」
「痛ぅわい!!」
強烈なデコピンがウェイバーを襲う!!
「お前さん何やっとんじゃ!」
「っだ、だって遠坂でまた襲撃が、こんな朝早くから行くと思ってなくて…」
「思ってなくともお前さんはマスター、余がどれだけ強くとも、それを扱う奴がへたっぴでは話にならん!!アサシンの時と言い全く……で?何か見んかったのか!?」
「見たって……」

ウェイバーの記憶では、丁度何者かが消える所からだ。
その後は何か鏡のような物を出した後、投げるように閉まったところしか……
「……ん？」
あの鏡はなんだ？
「……どうした坊主、何か思い出したか？」
「いやそれが、あの金色のサーヴァント、何か鏡みたいなのを取り出したんだ」
「鏡……」
ライダーも自慢の髭を手で触り、考え込む。
「多分……あれも宝具だと思うんだけど……」
「なるほど…」
「なにかわかった!?」
ライダー合点がいったと言うふうに頷き、ウェイバーに自分の見立てを聴かせる。
「なに、それは恐らく探知の鏡じゃろ、アサシンを倒した聞いたがこれで合点が言ったな！そ奴はそれでアサシンを見つけ出し、自慢の飛び道具で一気に倒したのだろう……しっかし増える剣の次は探知の鏡か～」
厄介だの～っと、呑気に言いながら、またビデオを見ながらスナック菓子を食べ始める。
何を呑気なとも思うが、これはライダーの自信の表れだろう。あれだけの強力な宝具を厄介の一言で片づけるのは、流石征服王の名を名乗るだけある。
「お!!７４式戦車の後継機の、この９０式戦車とか言うのは中々、これから配備される予定なのか……おお!!水陸両用なるものまであるのか!!」
「……」
ライダーの意見にウェイバーは考える。
確かにあれは何らかを見つけ出す鏡なのだろう……
（でもあのアーチャー、最後になんであんな風に……諦めた感じで

いたんだ？探知の鏡を使ったんだよな？その後何度か試したようだったけど…、何も見つからなかったのか？）

「そうだとしたら……」

気配遮断スキルを持つアサシンですら見つけた宝具が、見つけられない存在があった？

「………いやいやいやそんな馬鹿な」

しかし、実際にあったとしたら……

ウェイバーの脳裏にはそんな嫌な気配が纏わりつく。

（……もしもそんな存在が居たら、誰にも見つけられるはずがないじゃないか）

ウェイバーは布団を被り、また仮眠を取り始める。

彼はこれから知るだろう。この聖杯戦争が、過去に類を見ない程、恐ろしき結末になるのを……

・・・・・・・・・・・・

巨人が投じた一石は水面を大きく揺らす
理解の外の怪物は神の杯すら飲み干すだろう
世界の力すら超えた法則は新たなる秩序を生み出す
これはその始まりの波に過ぎないのだ
心せよ矮小なる者共よ
彼の名は超越者（オーバーロード）
彼を殺すのは英雄だ
彼が殺すのも英雄だ
故に彼に慢心は無い
人の強さを知る怪物がどれほど恐ろしきことか
その身をもって刻むがよい
彼の名は死の支配者（オーバーロード）
誰よりも臆病な怪物だ

危機

『遊びは無い！それは本気になっていただけると!!』

謎の生きる屍（リビングデッド）が消え去り、遠坂邸では時臣が、ギルガメッシュの言について問う。

ギルガメッシュ。古代メソポタミア文明の最古の王にして英雄。

神秘とは古ければ古いほど、その力を増すが、彼は身体的強さを持っていない。いや確かに文献などでは文武に優れた王であったと言われているが、此処がギルガメッシュの認知度…ギルガメッシュ叙事詩などに数えられる彼の偉業が伝わっていないのも、彼が元は武を用いない者であった可能性もあるが、基本的にギルガメッシュはその身で戦おうとはしない。

では何故遠坂時臣は、此処まで彼に全幅の信頼を寄せているのか。それは彼の偉業の中で、この世の全ての財を手に入れたとされているからだ。つまり…

「王の財を以てすれば、この戦争など一夜で片が着くのは間違いないがな…」

彼の本気とは、その集めた財宝による圧倒的飽和攻撃。

それぞれ高い神秘を帯びた宝具は、彼にももはや全貌が把握できない程多くある。故に、彼は世界最古であるなら、その物語……世界が一つだったころ、彼は王であり、彼の偉業は後世、その英雄たちの原点でもある。その英雄達が用いた武具全てのは、彼の財の中に原点があるのだ。ハッキリ言ってあらゆる英雄の弱点がつけるのだから反則もいいところの強さだ。

詰まるところ、ギルガメッシュの強さとは、その圧倒的宝具数、金に飽かした最強装備なのだ。

『そのお力振るわれるのなら、僭越ながら今夜にで「馬鹿め、我が早々本気になる物か」……え？』

熱が抜けていくように、間の抜けた声。

ギルガメッシュはため息交じりに時臣をたゆす。

「全く…お前は何のために我を呼び出したと思っておる」

『それは!・王こそがこの聖杯戦争において、最も強く尊い英雄であらせられるからです』
「その通りよ。ならばこんな面白そうなこと、早々に終わらせてはつまらんであろう?」
『つ……つまらないでありますか』
ギルガメッシュの答えに困惑する時臣。
彼は魔術の才能は極めて凡庸である。特に秀でる物は彼の属性である火以外、然程目を引く能力ではない。しかし彼は、必要とされる結果を出すためなら、その数倍の修練と幾重もの備えをもって事に当たり、常に結果を出してきた。弛まぬ努力と、惜しまぬその『本物の貴族』的あり方、『常に余裕を持って優雅たれ』を体現し続けた男だ。だからこそ裏付けされた自信があり、それ故自分の行動には間違いがないと思っている。
で、あればこそだ。
『……恐れながら、彼の英雄王の威光に怯え、あのような粗末な者を寄越した狼藉、遺憾しがたきものかと…』
「ほう…お前はあれが〝粗末な者〟だと?」
『ッつ!!い、いかに高位のリビングデッドであろうとも、王に対し取り合わせなく襲撃を掛けてき「もう良い、お前の真意などとうに知れているは時臣」……御見通しであらせましたか』
「ふん全く…お前のことだ、どうせ我の宝具でさえ捕えられなかった者が居ることを危惧し、これでアサシンによる諜報も難しくなると考えているのだろう」
『……全く持ってその通りでございます』
ギルガメッシュによって考えを読まれた時臣は、王の審眼とも言うべきか、その洞察力に舌を巻く。
時臣はこの事態、想像以上に拙いことになっていると確信していた。それはこのことが他のマスターにばれれば、確実にアサシンについて言及してくるからだ。
(そうなっては想定していた計画がご破算だ。王が本気になって下さればそれが全て解決するのに…)

「まあ、我としても吝かではないのだ」
『……っと、言いますと？』
一転して意見を変えたギルガメッシュに、時臣は疑問を持つ。
「奴は我の宝具……Ａ＋ランク相当の銅鏡にかからなかった。我としてもこれは中々に面白いとも思うが、同時に何故か危険だと、この我が思っているのだ」
『な！Ａ＋の宝具を!!』
時臣は使用した宝具のランクの高さに驚き。それ以上にそれの目を欺いた存在がさらに恐ろしく感じ始めた。いくらギルガメッシュが最強でも、それは時臣自身が強くなったわけではない。今回のような搦め手で、時臣を狙って来れば、一気にこの聖杯戦争は危ういものとなるのだから。
「騒ぐでない、それより何故我はこれほど危惧している？」
それは独り言のように聞こえた。
『？……それはどういった意味で』
「……」
ギルガメッシュは答えない。これは自身のプライドに関わることだからだ。
彼は傲慢だ。王としての姿を体現した存在と言ってもいい。
だからこそ、この感情が気に入らない。
（……この我が怯えている？そんな馬鹿なことあり得るか！一体どこに、この我を超える英傑が居ると言うのだ。だがここで本気になったとすれば…）
それはギルガメッシュが、謎のサーヴァントに怯えていると証明するようなこと、絶対にそれは認めてはならないし、決して彼はそれを他者に悟られはさせないだろう。
「……いやもういい、どちらにしろ今は取れる手段は無い。動きが有るなら今夜あたりだろうが……、それまでは散策でもして無聊を慰めていよう。時臣、委細は任せておく」
『はッ！』
「……それと」

『……はい』

「…………バーサーカーにはその動向、気を付けておけ」

『ん？何故バーサーカーが……』

ここでの狂戦士の介入は、全く時臣としても予想外であった。考えられる今回のリビングデッドの出処としては、アーチャー、アサシンを除き、セイバー、ランサー、ライダー、召喚され余りにもその行動が早すぎるため、キャスターは除外しても、バーサーカーがあれほどのリビングデッドを宝具として呼べるかと言えば疑問であるからだ。

「これ以上はお前で考えろ時臣、我はもう行く」

『ハッ！お気をつけて……』

金色の粒子となり消えてゆくアーチャーから、繋がっていた念話が切れる感覚がする。

「…………ふう、さてどうするか」

優雅たれ、その家訓を守るため、時臣は常に冷静を持たなければならない。

混乱していた脳は次第に次の一手を導き出していた。

「……まずは綺礼に連絡して、これからのアサシンの動きを決めないとな……」

時臣は座っていた革張りのソファーから立ち上がり、魔術によって作った、遠隔通信式の蓄音機が置いてある、地下室に潜って行った。

・・・・・・・・・・・・

蓄音機から発せられる情報に、時臣は隠しきれない動揺を見せる。

「な！…………なんだと!!」

『師よ、私もこの事態に対し、どれが最善か答えあぐねております。……私がもっと、魔術の造詣に深ければ、彼奴の正体を見破れたかもしれませんが…』

言峰綺礼の魔術の才は、こと「傷を開く」魔術特性に特化したため、魔術師としての腕は「見習いの修了」レベル、治癒魔術は並の魔術師

以上の物なのだが、大抵の魔術に通ずる以外、どれも平凡の域を出ない。

しかしこれは何も、綺礼が才能の無い人物である…と言った安直な話ではないのだ。

魔術を行使するには魔術回路と言われる、要は生命エネルギーである貯水庫から、どれだけ多くのパイプを繋げるかが、魔術師としての力を表しているのだ。

綺礼は父、八極拳の達人でもある言峰璃正直伝の業を使う元代行者だ。そもそも魔術を使うことは無いのだが、魔術回路は瑠正が長年の信仰によって得た秘蹟の恩恵で「秘蹟を再現する資格」を持って生まれたため、魔術の行使自体は出来る。これ故魔術回路は長い年代を重ね、それでようやっと増えていくものなので、綺礼のような一代目の魔術回路の持ち主は、誰も彼も見習いなのだ。

それもあって、どうやっても増やすことは出来ない、また増やすとしても相当危険な……例えれば別の人間の臓器を移植するようなもので、魔術回路とはそういったデリケートな物なのだ。

綺礼にはこれ以上魔術を伸ばすことが出来ないことから、時臣からは「見習いの修了」までのことしか教わっていないのだ。それが今回彼にしてみれば、知識に無い者との遭遇……いやあれは……

『私自身、代行者時代からあのような屍を刈ってきました……だからわかります。あれはもはや通常のリビングデッドなどではないことを……、師よ！あれは何なのか教えてください！もはや私の知識ではあれを特定できません！』

背後に控える言峰瑠正も、あのような生きる屍（リビングデッド）など、話にさえ聞いたことが無かった。

フリーランスの死霊術師の中で、凄腕の魔術使いが居ると聞いたことはあったが、それでもあのような異常個体を作り上げることなど、その死霊術師でも不可能であろう。

瑠正としても、下手に代行者としてそういった邪悪な物に触れてきた故、相手の異常性が分かったことから、このような想定外の事態にどう対処していいのかわからなかった。

「……綺礼よ」
『はい…』
「……私の所も襲撃を受けたのだ」
『!!なぜッ!!情報が!!私たちの同盟がばれたのですか!?』
「……それはわからない」
時臣はこの事態にどう対処すればいいか、家訓である優雅さを捨てるほど焦りに焦っていた。
（一体何が目的だ!!何故アサシンのいる教会にリビングデッドを差し向けた!?糞一体何が起きているんだ!!）
混乱が混乱を呼ぶ。
時臣は僅かな理性でもってそれを押さえつけ、綺礼に事のあらましを説明した。
「実はあれは恐らく――――」
『――――』
宝具の可能性、ギルガメッシュの銅鏡から隠れる隠密性、あれは恐らく一体だけでないということ全て伝え終えると、場はかなり重苦しいものとなっていた。
『なんと……それではザイードの死は無駄であったと!?』
陰に潜むアサシンたちから、僅かに動揺がある。彼らも全て同じ、元は一つの肉体があったのだ。その一つを失ってまでやった行為が無駄であったなどと、アサシンの吟味が無ければ離反していたかもしれない。
彼らが暗殺者としての立場を理解している故、一応今は従ってはいるが、やはり感情は消せない。綺礼は感じ取ったのか、時臣に無駄ではないと何とか言ってもらいたいのだが……。
「……無駄ではない……が、これからはかなり難しくなっただろう。アサシンはそこ居るのか綺礼」
『…はい、居ります』
「そうか……少し話させてくれないか?」
『わかりました』
即座に控えていたアサシンの一体に来るように命じた綺礼は、入れ

替わるようにしてアサシンの後ろに着く。
「……今回はかなり想定外の事態が起きている、君たちの行動にも支障が出るかもしれないが、これからも絶対にその姿が見つからないよう、気をつけてくれるか？」
『…戦争に想定外とはつきもの……、そう心配なされるな、マスターの師よ、私としても思う所はあるが、決して主となったものを裏切りはしませぬよ』
「そういってくれるとありがたい、山の翁よ」
取りあえずは無駄な令呪を使わなくて済んだと、時臣はほっと胸を撫で下ろす。
「さて……相手は恐らく偽装死したアサシンの対策が緩んだ、その瞬間の狙ったのだろうが結果は知っての通り。何故そちらにも行ったかは知らないが、重要な物は大丈夫か綺礼？」
『そこは滞りなく、あっても重要度の低いものですので…』
「うむ、それで彼奴の足取りは？」
『はい、ただいまアサシンを3人、尾行に付かせておりますが……ん？』
「？どうした綺礼」
何やらまた不穏な空気が漂うはじめ、時臣の背にも嫌な汗が流れる。
『……念話が繋がらない？』
「……どう言うことだ!?まさか倒されて」
『いえ、それはありません、放ったアサシンのパスは未だ繋がっております。しかし奇妙なことに念話だけが繋がらずに……』
「……」
この不自然さ、言峰も時臣も、何やらまずいことが起きていると悟る。
「綺礼!!他の情報収集に当たっているアサシンを戻せ、それとそのアサシンもだ!!」
『……ダメです！念話が繋がらず命令が出せません!!』
「令呪を使うことを許す…」

『ッ!!しかし宜しいのですか!?この序盤で!!』
「構わんさ、それよりも嫌な予感がする!」
令呪とはサーヴァントに対しての絶対命令権。これは高密度の魔力であり、三度までならその力を使い、空間転移すら可能にする代物だ。それを怪しいからと言って、この序盤で使う時臣に、綺礼は驚いていた。時臣は慎重な方だと思っていたが、此処まで思いっきりがあったとは。
(王との会話でもわかったが、この相手は不気味すぎる!!)
『わかりました!!……アサシンよ、令呪を以て告げる』
綺礼の手に宿る令呪が赤く光る。効果を示す証拠だ。
『…この場に居ない者よ、空間を越え我の元へ集え!!』
光が発せられた瞬間。そこには確かに、分裂させておいたアサシンが居るのだが……
「どうだ綺礼?」
『…………』
「?綺礼、どうした綺礼!!」
返答の無い綺礼に焦り、時臣としては珍しくその声は優雅とはかけ離れたものだった。
『………師よ』
「おお綺礼!どうした一体!?」

『アサシンが足りません』

…………

「うわ!!なんだこの網は!!」

「くそ!!どうなってる!!マスターと連絡が取れんぞ!!」
「っく!!殺せ!!」
「モウシワケゴザイマセン!!!フカクコノミ、ビコウヲユルスナド……カクナルウエハコノミヲモッテ……」
「キャスターさん!!コイツらの仮面ってイカしてないっすか!!いい感じにＣＯＯＬだぜあんた!!」
「……どうしよ」
トラップにかかったアサシンに、アインズは頭を抱えた。

不可解

時は遡ること数時間前。
ギルガメッシュが暗闇の追跡者（ダークネス・ストーカー）に死に逃げ切られたところから始まる。
「……マズイ」
「どーしたんすか？なんか深刻そうにして」
アインズは情報収集の為に創り上げた存在、ダークネス・ストーカーは斥候系のスキルが豊富に取られてある。
アインズ自身、ＰＶＰなどでは使うことは無いが、ダンジョン攻略など、威力偵察として重宝してきたものだ。が、今回は多少危険を冒してでも情報が欲しかったアインズとしては、これは危険な賭けに近かった。
（俺の過去の故郷だったとしても、敵は全くの未知の技術を扱う存在。ダークネス・ストーカーも最悪捕まり、私の情報が漏れる可能性も考慮していたが…、最悪の結果だ。賭けに負けたと言うことか……）
召喚された当初、取れる手段などほぼなく、出来る限り表には出ない様に、情報を集める為の行動を目指したアインズ。
ダークネス・ストーカーは、今アインズの手持ちの中で最も隠密能力の高いアンデッドだ。彼らが駄目だったのならば、今回の聖杯戦争の情報も、この世界の魔術に対しての情報も、得られない可能性が大きい。
（何よりこの戦争、勝ち残るのはやはり難しいか……）
ダークネス・ストーカーを撃破され、最悪こちらの居場所を特定された可能性もある。いやされたと思って行動した方が好いだろう。
隠密系統を見破る力がこの世界は強いのか、それともアインズのユグドラシル魔法が弱いのか、実際に試そうにも英霊を前にするのはリスクが大きい。どちらにせよ、アインズは早くも追い込まれている思っていた。
（ええい!!嘆いていても始まらない!!ぷにっと萌えさんの言葉を思

い出すんだ!!)
かつての仲間が残した教訓。それはアインズが異世界でも常に実践し続けたもの。
(冷静な論理思考こそ常に必要なもの。心を鎮め、視野を広く、考えに囚われることなく、回転させるべき……うん!ありがとうぷにっと萌えさん!!希望が湧いてきました!!まずは……)
「…マスター、今からお前に幾つかの魔法をかけるが……いいか?」
「え!!マジですか!!」
キラキラと目を輝かせるそれは、ある種純粋な子供と同じ眼であった。
アインズも龍之介の押しの強さに、ちょっとばかりたじろぐが、まあ龍之介性格が分かって来たアインズも、早々この食いつきの良さになれんとな〜と思う。
「んゞんゞ、…私が作ったダークネス・ストーカー……あー、あのアンデッドのことなんだがな」
「ん?キャスターさんがあの家の中で、俺が殺した家族を使って呼び出したゾンビですか?」
「いや色々違うが……まあそのゾンビがだな、何者かにやられてしまったようなのだ」
「はあ!!なんすかそれ!!!ムチャクチャＣＯＯＬなあれを!?ちょっと相手さん失礼過ぎません!?」
(いや戦争だからそんなことないんだけどね)
龍之介の忠誠心が、アインズの生み出したアンデッドを倒すとは、なんと不届きな者かと、まあそんな感じに怒り心頭な様子だ。
そんな龍之介をなだめるべく、先ほど思いついた計画を、アインズは話した。
「マスター、これは戦争なのだ。規模自体は小さいが、君たちのような生身の人間では到底太刀打ちできない存在が今この冬木に居るのだ。だから落ち着いて私の話を聞いてほしい」
「あ……すいません……」
「いや構わんよ、マスターがそこまで私に忠誠心を持ってくれてい

るのは嬉しいことだ……でだ」
アインズは龍之介に手を翳すと、淡い光を龍之介を包み始めた。
「《無限障壁（インフィニティウォール）》、《魔法（マジック）からの守り（オード）》、《竜（ドラゴニック）の力（パワー）》、《上位全能力強化（グレーターフルポテンシャル）》、《自由（フリーダム）》、《虚偽情報（フォールスデータ）・生命（ライフ）》――――……」
かつて、世界級ワールドアイテムによって洗脳されたシャルティアと、激闘を行う前に掛けた防御魔法や対抗魔法、それ以外も今回アインズが使用できる、最大限の魔法の数々を龍之介と、アインズ自身に掛ける。
「うわ!!うわ!!!!うわ!!!!ナニコレSUGEEEEEEE!!!!!!」
急に体から、超人的なパワーを感じてテンションがMAXになる龍之介。彼が今感じている力の上昇が、イメージとしては、某アメコミの物理学者が、緑の怪物になった感覚に近いだろうか。
「騒ぐでない。もしかしたらもうすぐ敵が来るやもしれんのだぞ…」
「!!……敵ってーと、キャスターさんと同じサーヴァント……ですよね？」
「そうだ。今からどれだけ通用するかわからんが、罠を張っておくつもりだ……その前に」
アインズは手元を耳がある……と言うよりか、耳があった場所に添える。
『あーあーあー、聞こえるか？ダークネス・ストーカー』
『オオ！コレワコレワワガアルジ、ドウナサレマシタ？』
メッセージと言う、遠距離からでも、会話が出来る魔法を行使したアインズ。
『いやなに、首尾はどうなっているかと気になってな』
ここでアインズが、他のダークネス・ストーカーがやられた、もしくは自害したという情報を流さないのは、此処での会話が盗聴されているの可能性を恐れたからだ。
実際、アインズが創造した部屋は、幾重にも重ねた防衛魔法で堅牢だが、それでもダークネス・ストーカーが倒されたことで、その防衛が怪しくなった。

（ここで罠なんかの情報を渡したら拙いしな、ダークネス・ストーカーは巻き添えくらうかもしれんが、まあいいか、それより罠が利いてくれたらいいな～）

『ハッ!!ゲンザイマトウケニシンニュウ、ワガソンザイハカクニンサレテオリマセン』

『……ん？』

『？ドウカナサイマシタカ』

アインズは聞こえ間違いだったのか、もう一度、ダークネス・ストーカーがどこに居るのか聞いた。

『……すまん。もう一度どこに居るのかを教えてくれないか？』

『ハッ!!ゲンザイマトウケニシンニュウシテオリマス!!』

……

マトウ……

マトウケニシンニュウ……

間桐家に侵入……

（それ御三家の所じゃん!!!!バレる可能性が高い所じゃん!!!）

聖杯から与えられた知識で、冬木に聖杯を卸す儀式、聖杯戦争を始める切っ掛けとなった三つの家。

その御三家と言われるのは、アインツベルン、遠坂、そして間桐である。当然そこは戦争の為、防衛を強化していると見て間違いない。

（なんでよりによって近場で一番危なさそうなとこに行くかなー!!そりゃバレて倒されるよねー!!）

『ん〝ん〝、なぜ間桐に行ったのだ？』

なるべく優しく、まずは相手の言い分を聞いてから確認を取ろうとアインズは聞くが、やはりかなり頭にくる。

『ハッ!!ゲンザイワカッテイルマジュツシノイエハ、アインツベルン、トオサカ、マトウシカチシキニナク。キョリノモンダイデ、アインツベルンヲノゾク、トオサカ、マトウ、ソシテセイハイセンソウノキロクガアルトオモシキ、キョウカイニジョウホウヲサグリニイッ

テオリマシタ』
『……』
『アノ……ナニカシッタイヲ……』

（それって説明してなかった俺が悪いんじゃ…）
当然である。魔術師の家の場所を知らずに、他にどこを探せと言うのだ。
冬木市には確かに魔術師は存在している。が、これは場所を知ってなきゃならんし、魔術師の家なんてグ○グルマップに出てくる訳もないのだ（この時代まだそんなの無いが）。
『ん、いやなんでもない。そうだな…。そのまま情報を集めてくれたえ』
『ハッ!!カシコマリマシタ』
『うむ……ああそれと、くれぐれも見つからないようにな！帰還するタイミングは此方からする。それまでは決して見つからない様に!!』
『ハッ!!』
執拗に念を押し、これでもすでに見つかっている可能性もあるのが辛い……。っとアインズは頭を抱えるが、まだメッセージを行う相手はもう一人…。
（ふう～、もっと考えて行動しないと、ぷにっと萌えさんに叱られそうだ……ああデミウルゴスにアルベド、こんな時にお前達が居てくれたら……）
実際、彼らが居ればダークネス・ストーカーの召喚時、その情報を流出する可能性を考慮し、攻勢防壁などを掛けようとしただろう。まあアインズが魔法を使わなかったら、それの真意だとか言って盛大に勘違いするのだろうが……。
しかし嘆いても賽は投げてしまったのだ。出た目には必ず従う他ない。

「?、キャスターさんさっきから何してんすか?」
「ああ、ちょっとな……もう少し待て」
「は～い」
アインズはもう一つのアンデッド。教会に行っているダークネス・ストーカーにメッセージを使った。
『オオ!!コレワワガアルジ!!モウシバシオマチヲ、アトスウフンデトウチャクイタシマス』
(危ねーーーー!!!)
まさに紙一重。
メッセージが遅れ、最悪敵にそのまま侵入されていたかもしれないと思うと、アインズが今汗を掛けたら冷や汗でびっしょりになっているだろう。
『おおおうそうか!!だが念には念を入れて、少し寄り道でもしたらどうだ!』
『イエメッソウモ!!スグニデモ『いいから!!帰ってくるタイミングは此方から連絡するからな!!』……ハ、ハイ』
鬼気迫るように時間を遅らせることで、何とか対策を打てる時間は作れたが…。
「さて……どう動くべきか……」
今現在、アインズ自身、こちら側が下に出ていると感じていた。
話を聞くに、ダークネス・ストーカーが討たれたのは遠坂陣営、ならばそこの刺客が何時来るとも分からない状況。
「………トラップは張っておくべきか」
魔法の有用性が分かっていない時点で、アインズは期待していないが、龍之介に掛けた魔法や、自身に掛けた魔法の効果から、決して相手に与えるダーメージがゼロではないと思いたい。
「仕方ない、兎に角手早く済まそう!マスターは此処で待機!」
「ラジャー!!」
アインズはそう言うと、《上位部屋創造(クリエイト・グレーター・ルーム)》を後にした。
・・・・・・・・・・・・・・・・

「さてと」
ダークネス・ストーカーが帰ってくる場所であろう。マンホール下にアインズは何やら、見慣れぬ繭のようなものを持っていた。
「この《幻影蜘蛛の繭（ファントムスパイダー・コクーン）》は、俺じゃ使えないスキルだったが、蟲系統のスキルも難なく使えるか」
アインズは手に持っている、半透明な繭を、マンホールの真下に張り着けた。すると繭は一瞬で、その姿を透明に変え、通常の視認では不可能な物となる。
「ま、こんなんじゃちょっとでも対策取ったらすぐばれる様な物なんだけど」
ダークネス・ストーカーは当然、パッシブでこのようなトラップを見分ける能力を持っている。
ゴースト系にも有効なこのトラップが、英霊にも利くか分からない現状、現段階でこれだけでは当たり前だが心もとない。
「……ここら辺かな」
繭から少し離れた場所。丁度《幻影蜘蛛の繭（ファントムスパイダー・コクーン）》を避けた箇所に、一か所だけダークネス・ストーカーが飛び降りても安全な所を作って、多数のトラップを設置する。他にも妨害魔法と、それはどれも凶悪な物だが、ダークネス・ストーカーの通り道以外は一切、そう言ったトラップがないのは、アインズが情報を期待しているのもある。
「これが駄目ならもう諦めるしか無いのかな……」
但し、それらが上手く発動してくれたらだ。
アインズは一通りやり終え、龍之介の待つ場所に帰っていく。
「……あ！そう言えばこの服」
ゲートで帰ろうとしたが、その前にアインズは自分の服を見た。
「……この服何にも魔法の効果付いてないのか」
それはただのデータ容量が大きいだけの豪華な布の服であった。
見た目はアインズがいつも着ている神器級のローブなのだが、なぜか付加されていた魔法は全て無くなっていた。
「……聖杯が模倣しようとしたが、出来ずに形だけ作ったのか？」

可能性としては、アインズのスキルにも書いてあるように、ユグドラシル魔法が、この世界の魔法の常識からかけ離れた物で、聖杯でもアインズの魔法は、魔力消費量を多くしただけで制限できなかったものだ。装備品が一切形だけの代物になっているのもそれで考えが着く。

「あ～、このままじゃ不味いな。防御系の魔法で固めておくか」

付加魔法（エンチャントマッジク）で、データ容量限界まで防御魔法を固める。これがあっという間に出来るのだから、そりゃこの世界の魔術師からしたら正気を疑うだろう。

「ん、こんなもんかな？まっこれが意味なく貫通したら確実に積みなんだがな、ＨＡＨＡＨＡ……笑い事じゃないよ」

さっきから暗い考えは、やはりダークネス・ストーカーが討伐されたせいか、アインズの精神は低い位置で低空飛行を続けていた。

「………あーもう!!完全に出たとこ勝負で辛い!!ぷにっと萌えさんの教えを実践出来ちゃいないじゃないか!!」

苛立つ心は誰にも聞こえず、ただアインズを悩ませるばかりである。

「はあ～、本当に僕が居ないとこんなにも心細いなんて……異世界に飛ばされたときはギルドごとで良かったけど……」

今のアインズは実質一人で、この戦争を勝ち残らなくちゃいけない。

龍之介も使える事には使えるが、それは戦闘ではない。ぶっちゃけ戦いはアインズの魔法が使えるか使えないかで、キャスター陣営のこれからが決まるのだ。

「……そうだよな。どっちにしろ英霊と戦う時が来るかもしれないんだ。万が一侵入者が来たら、このトラップでその有用性は証明される」

アインズは自身を勇気づけるようにして、ゲートにて帰って行った。

・・・・・・・・・・・・・・

「あ！おかえりなさーい!!」
「……」
「？」
「？」
急に部屋から黒い靄のようなものが現れても動揺しなくなった龍之介は、これまでのアインズの魔法に馴れたのか、部屋の外にあったコンクリート片で、筋力が上がったのを確認するかのように、握り潰す遊びをしていた。
「？おーいキャスターさん」
「……どゆこと？」
しかし帰って来たアインズの様子がおかしかった。
なぜか龍之介と同じように首を傾げている。
「……《時間停止（タイムストップ）》」
アインズがそう言った瞬間。龍之介の背後にアインズが立っていた。
「うお!!びっくりした！」
「……」
アインズは手を顎に置き、無い眉を寄せるようにして考える。

（……なんで空間系の魔法が燃費よくなってんの？）

謎である。
アインズはユグドラシル魔法がこの世界では常識外であるため、聖杯はそれの力を魔力を多く消費させることでしか、制限できなかった思っていたが……。
（違うのか？一体全体何が魔法に及ぼしているんだ？）
ユグドラシル時代以上に、燃費が向上している現状。何がどうなっているのかアインズの脳みそじゃこれ以上わからない。
（クッソわかんね～、どうなってんだよ一体……）
アインズは静かに、兎に角ダークネス・ストーカーにメッセージを

送り、この問題を棚上げにした。

・・・・・・・・・・・・・

んで現状がこれである。
「まさか最初のトラップに引っ掛かるとは……予想外だわ」
「コノミイツデモクビヲサシダシマスルワ━━」
「キャスターさん！コイツのお面とってもいい？」
「くっ!!」
「やめなさい危ないから」
「はーい」
「サスレバイツデモドノヨウナコトデモ「お前ももういいから、マスターと一緒に戻ってろ」アッハイ」
「……さてと」
ダークネス・ストーカーと龍之介、二人が帰っていくのいくのを見届けると、アインズは三人の暗殺者に向いた。
「君たちには色々聞きたいことがあるんだがね……アサシンのようだが何故三人何だ？」
「…………」

ガリッ
アサシンの一人から、何か噛むような音がした。すると仮面の下から血が垂れ出て、その一人が舌を噛み切ったとわかる。
「《大治癒（ヒール）》」
だがアインズがこれを許すはずがない、すぐさま死ぬ前に治癒魔法を施し、アサシンの舌は元に戻った。
「くッ!!」
「なるほど、アンデッド系のゴーストにはダメージになるが、君たち英霊は普通に回復するのか……後で私も試してみるか」
「……我らは何も喋らんぞ。山の翁の端くれとして、決して情報など吐くか」

「ああ別にいい、試したい魔法があるからな」
そう言うと、アインズはアサシンの一体に手を翳す。
「さあ……君たち英霊は私の知るゴースト系アンデットでは無いようだから……、これには効果あるかな？」
「っっ!!!」
「《一最強化・全種族魅了《マキシマイズマジック・チャームスピーシーズ》》」
「ぐあ!!ッっっ!!!」
手始めに魅了系魔法を使ってみると、以外にも簡単に掛かってくれた。
「ほう!!……これはこれは」
アインズは残り二体にも同様の魔法を掛け、自分の魔法の有用性が、この世界でも高いと確信した。
一気に勝率が上がり、舞い上がりたいものだが……。
「だがまだだ、慢心はしてはいけない」
アインズの記憶に残るは、過去の英雄達。
彼らは皆、アインズを驚かせるような結果を見せつけてきた。
「……命を投げ打って、私に傷を付けた者も居たな……ああいった英雄が居るから、ダークネス・ストーカーはやられたんだろう」
アインズはその実、人間に対する評価は高い。
昔は虫のように感じていたが、数々の英雄と出会い、その奇跡とさえ思えるほどの結果に、彼らは決して侮るべきではないと思ったからだ。
「……可能性の獣。誰が言ったか、本当にそう思うよ……嫉妬してしまいそうなぐらい」
だから、
「……絶対に、君たち英雄に勝つ」
魔王が動く。

手腕

「くそ!!一体全体何が起こっている!!」
遠坂時臣は、言峰綺礼から伝えられた事実に、彼の家の家訓すら投げ打つほど狂乱していた。
『師父よ!!落ち着いてください!!』
「これが落ち着いていられるか!!朝から一体何が起きている!!」
早朝の、教会との同時襲撃、更にアサシンの安否不明と来た。
もはや完全に敵の術中に嵌っていると言っていい。
「綺礼!!数え間違いではないな!!」
『……はい、確かに三体、私が尾行するよう命じた者たちが居ません』
「くっ!!」
髪を掻き毟り、その形相は彼を知る物ならきっと目を疑うことになるだろう。
「綺礼!!アサシンの反応が消えた場所はわかるか!?」
「はっ!!念話が通じなくなった場所から割り出すと、かなり広範囲ですが……」
「それでいい!!地図を送れ!!」
遠隔通信魔術から送られてくる地図を目に通し、時臣は怪しい個所を指摘する。
「綺礼、この龍脈の位置からすると、一番近場が冬木最大の霊地である柳洞寺だが…、元代行者から見て、彼奴の居場所はわかるか?」
時臣は専門家の意見として、彼よりかは遥かに実戦経験が豊富な綺礼に、その見識を問う。
『……まず、アサシンが事前の調べで柳洞寺には、そのような異変は発見できませんでしたが…』
「……相手は英雄王の宝物庫から使われた、探知の宝具ですら発見できなかった相手だぞ?アサシンの目を誤魔化すことも出来るやもしれん…」
『やはりそこが厳しいですか…、相手に先手を打たれている現状、ど

うしてもこちら側の動きは鈍い』
「だからと言っても、こうも手を拱いては…!!」
『……時臣殿』
不意に、綺礼の背後から、老練なる声がする。
「!その声は瑠正殿」
時臣に声を掛けたのは、言峰綺礼の父にして今台の聖杯戦争監督役、言峰瑠正である。
彼としても、教会の規範を破ってまで遠坂時臣を、この聖杯戦争に勝たせたい思いでいるのだ。
聖杯は万能の願望器、模造品であっても聖人の杯なのだ。故に悪しきものが使えば一体どのような惨事なるかわからない。それに比べれば遠坂時臣と言う男は信頼に置ける人物であった。
あくまで根源、所謂アカシック・レコードへの接続こそが、彼の家の悲願であり、それ以外は道端の石の如く興味はないのだ。瑠正はそう言った、時臣の純粋な魔術師としての願い……何より彼個人としても、時臣の勝利を願う物であり、ロートルであろうが、彼は彼なりの案を出す。
『今回の一件、我々教会側に対する挑発行為とみなし、先のリビングデッドの対策として全陣営を集合させるというのはどうだ?』
「それは……」
時臣としても、それで炙り出せればいいのだが、それでも不安はある。
果たしてそれで来るのか?
「……難しいのでは?その程度敵も重々承知のはず。第一まだどのクラスか判別できていない状況。ここで陣営を集めても」
『…今回の一件で、我々教会に手を出した敵も愚かでしょう。集合を掛ければ誰かが教会に手を出したと知って、要らぬ争いをしてくれる』
瑠正の作戦は他サーヴァントの消耗だ。
謎の襲撃犯を見つけた者には令呪を与えるとでも言って、互いに削り合って貰うのが目的であった。

「なるほど…上手くこちらからも誘導できれば良いですが。だがなぜリビングデッドが教会に来たのかがわからない……、まさかアサシンの存在に気づいたとか？だがそれでも教会に行くリスクが大きい……」

『まあまあ、どちらにしろ我々は後手に回っている、ならばこちらでも一度手を出してみるのもいいのでは？』

「……」

瑠正の意見ももっともだ。今どれだけ考えてもそれは机上の空論を出ない。

ならば何かしらのアクションを起こし、出方を見るのもいいのでは？

（……ナンダこの違和感……、まるで思考を誘導されているような……）

ここまでの一連の流れ、これが向こうの思惑だったとしたら、一体の何が目的か？延々とループするようだが、どうしても時臣は、この嫌な感じをぬぐい切れていなかった。

『……よ、師よ。大丈夫ですか？』

「ん？ああすまない、……瑠正殿、お願いできるか？」

『無論』

結局、時臣はこの流れに乗ることにした。

どれだけ考えても行き着かない本流のようなもの、いくらそれを考えたところで無意味なのだ。

（願わくばこれが最善と思いたい）

『では早速、私は全マスターに合図を…――すまない時臣殿、来客だ』

「こんな時に来客？一体誰が…」

『申し訳ないがこの門を開けてもらえないか？神の家は誰にでも開け放たれるのだろう？それがマスターであろうとも、ならば直ぐにも来てもらいたいのだが……私は〝襲撃〟など考えておらんからな、監督役殿……』

・・・

我の恐怖の根源だったとすれば、我の死が近いとも言うのか？」
確信はない。されど心が告げる、お前の死はもう直ぐだと。
「……下らん。このような考え自体下らん。我の恐怖が死であれ、もはやこの我はそれを気に掛ける事などある物か」
逸話の反映、ともとれる感情。
かつてギルガメッシュは、親友エルキドゥの死を目の当たりにしたことにより、死と言った物に対する恐怖が彼を襲ったことがある。それもあって、もう英霊となった身に置いても、彼の心には未だ、燃え残った火種のように燻っていた。
「……今夜あたり、動きが有るはず。ならばそこで見極めてやろう、この感情の正体を」
黄金は消え去り、残ったのは街の喧騒のみであった。

・・・

「それで何用でしょうか？昼とは言えマスターが教会に足を運んで下さるとは……聖杯戦争についてでしょうな」
『さよう。昨晩に遠坂でアサシンの襲撃があったのはそちらも知っておられよう？』
「……はい、霊基盤にアサシンの敗退を確認いたしましたので、それが何か？」
『……早朝未明、何やらまた、遠坂邸で動きが有ったようですな』
「……」
やはりかと、心の中で呟く瑠正であるが、今の現状では誤魔化す以外、彼に取れる手段は無かった。
「……それは初耳ですな。私の知らないところでそのようなことがあったとは、しかし報告が無かったということは、神秘が漏洩する危険性が無かったということ、ならば問題ないのでは？貴殿は一々戦闘があれば教会に足を運ぶのですか？そのように熱心に神の家まで足を運んで下さるのであれば……どうですかな？祈りでも捧げますかな？それとも懺悔を？主はたとえ魔術師でも、その御心により悔い改めれば、必ずや神の門は貴方に開かれるでしょう」
『ハッ、言うではないか監督役。今回の一件は貴殿も知らなければならないことであろう…いや、もう知っているか』
「……どう言うことですかな？」
『アサシンはまだ生きている』
「……何？」
何故それを？瑠正の困惑を、ただの演技と思ったケイネスは続ける。
『上手いなご老人。まあ早朝の出来事もアサシンと思しきサーヴァントが襲撃している場面を見てな、いやこれはもしやアサシンはまだ生きているのでは……と思ったまでだ。アサシンのマスター……確か君の息子さんだったな、そして君の息子はあの遠坂に師事を受けた……おやおや？これはどういう事かな？』
「……タダの憶測で判断して貰いたくありませんな」
いやらしく突いてくる言い方に物申したいが、ここで取り乱せばそ

れは真実であると言うようなもの。瑠正は完全に、この名も知らぬ魔術師に手玉に取られていると思うと、激しく頭にくるが、冷静に自身の感情を押さえつける。

『まあそう言ってくると思っていたさ。だが君たちのことを疑ってしまうのは当然だろう？遠坂と君たち言峰の関係は密接だと調べさせてもらったからな、もしもこのことが教会にばれた時には……君たち一家はどうなることやら、いやいや悲しみで前が見えなくなるよ』

白々しいにも程がある。瑠正はこのマスターの性根が気に食わないと思いつつ、これは相手がボロを出して来るのを待つ手段だ。ここで大きく出れば更につけあがる。

ならば……。

「……実を申しますとな、こちらも早朝に襲撃を受けましてな」

『……なんだと？それは本当か!?』

使い魔越しにノイズのように声を変えていても、その動揺が手に取るようにわかる。

数秒何やら考え込んでいたようだが、すぐさま対応してくるとは、中々に侮れないマスターであると、瑠正は思う。

『あいわかった。そちらもアサシンと思しきサーヴァントに被害を受けているのなら、同盟を疑われるようなことは無いと』

「そう言うことですよ、魔術師殿。現にこれから全マスターに通達しようとしていたところでしてね、教会に襲撃を掛けた者に対して、何か情報でもと……そうゆう次第なのです」

『――――ふむ』

またも沈黙が落ちるが、それは先ほどより短いものだった。

『……そう言うことならいいだろう。だが仮にもし、アサシンの影でも感じれば、私は君たち教会が、規約違反を行なっていると見なすが？そうなれば私も考えがある』

「ふふ、可笑しな人だ。万に一つもなく、仮にそうだとして貴方に何ができるのか？協会が末端の魔術師の話を聞くとは思えませんが？」

『……――――く、くくく』

「何がおかしいのですかな？」

事実そうだ。ここまで大胆に瑠正が時臣と協力しているのは、それが聖杯戦争という物が余り、外部からの接触が無い儀式だからでもあるのだ。

ここで不幸なのは、言峰瑠正も、遠坂時臣も、外部の魔術師はそう言った酔狂な、東方の辺境の地まで来るような者は、例え論教から来たとしてもそこまで政治的に強い立場の者でないと思っていることであった。

そもそも聖杯戦争自体マイナーな儀式……言ってしまえば外部から弱い魔術師を根源と言う餌に釣らせ、必要な英霊の枠を取らせるためのものだ。賢い物ならそもそも、参加する前にうさん臭い代物と吐き捨てるだろう。

ケイネスはただ箔付けの為もあり、聖杯事態トロフィーのようなものとしか考えておらず、この考えも彼ら二人の計算外と言えよう。

『ああすまない、言い忘れていたことがあった』

「……なにか」

『とっ、その前にだ』

使い魔越しから何やら細工するような音がする。

『ああ安心したまえ、ただの音声を録音する魔術器だ』

「それで？私はそれになんと言えと？」

『話が早い。いや単純に、先ほどまで君が言ったことを話してくれたまえ、遠坂とは何もないのなら、此処で話を記録されても問題ないだろう。そう思わんかね？』

「……」

嫌な感じがする。もしやこいつは教会と深いパイプを持っているのでは？そう思い始めて瑠正は僅かながら躊躇いが生まれる。

『おや？どうなされた監督殿、まさか先ほど言ったことは全部嘘で、裏では遠坂と糸を引いていると？』

「いや！そんなことは無い!!我々教会は中立だ。こちらがそれを守っているうちは、そちらもルールに従っていてもらうのが、先達からの盟約となっている」

『ならばお願いしようか、監督殿』

「……」
瑠正は話す。もしここで、憎たらしい使い魔が、何か敵対的な行動をとれば、堂々とマスターごと潰せるのだが、相手は嫌になるぐらいに全く、〝教会〟に不利になることはしていない。的確に瑠正達の嫌な所を突いてくるだけなのだ。
（最悪……ッ！仮に最悪このマスターが魔術協会に何らかのパイプがあった場合、優先的にこのマスターを排除せねばならんか……くそ!!ただのブラフならばいいのだが）
「――これでよろしいか？」
『ああ構わないとも』
「……それで？言い忘れていたこととは？」
『いやなに、自己紹介がまだだったと思ってな』
「……それは」
『私の名はケイネス・エルメロイ・アーチボルト……時計塔で講師を務めている者だ』
「なッ!!」
瑠正も聞いたことがある名だ。
時計塔において最年少で降霊科講師になった天才魔術師。その手腕は魔術師の中の政治にも強い権限を持つと言う。
（不味いぞコレは!!ここまでの大物は想定していない!!）
ここぞとばかりに音声のブレは消え、ハッキリとその声は教会内に響く。
『いやしかしこれで安心しましたぞ監督殿！〟協会が選抜した監督役〟が、まさか土着の魔術師と協力し、尚且つ魔術協会との間で決めた聖杯の扱いで、貴殿ら教会の管理下の元の戦争……まさか協定違反をそちらでしては、全世界の聖杯の扱いも、こちらで考えなければいけませんでしたからな～。いや全く安心した、一応このことは時計塔の我が家にも話しておきましょう……なに、貴殿らが規約違反をして

いないのなら全く心配の要らないことなので悪しからず……ではまた後程』

「――――――」

してやられた。

瑠正は律儀に正門から堂々と出ていき、人目に付かないうちに消えていった使い魔を眺め、現状の余りの不味さに頭を抱えた。

「……どうするッ!!」

・・・